

鬼塚遺跡第13次(遺構編)・第22次発掘調査報告書

目次

調査に至る経過	1
地区別と調査経過	4
調査地の地形と層序	4
調査の結果	9
古墳時代の遺構	9
奈良・平安時代の遺構・遺物	15
中世の遺構	46
近世以後の遺構	58

例言

1. 本書は、財団法人東大阪市文化財協会が、平成2年度に株式会社富士住建より委託を受けて行った共同住宅建設に伴う鬼塚遺跡第13次・額田寺跡遺跡の発掘調査で検出された遺構と、平成11年度に医療法人孟仁会より委託を受けて行った老人施設建設に伴う鬼塚遺跡第22次発掘調査で検出された遺構・遺物についての報告書である。13次調査は平成2年7月26日から平成3年10月21日まで、22次調査は平成11年5月25日から平成11年11月10日まで実施された。これらの調査は、調査年次、調査回数ともに隔たっているが、同じ敷地内(東大阪市南荻町1032-1他)のたがいに隣接する領域で行われた。そのため、共通する記載を節約し、両調査で検出された遺構の分布を一括して扱うことになった。
2. 第13次調査は福永信雄(東大阪市教育委員会)と松田順一郎が、第22次調査は池崎智詞が担当した。第13次調査の外業および内業には浅井総一郎、市川蘭子、今池広樹、今井滋樹、大須賀美樹、大山えりか、甲斐典子、甲斐裕明、梶本洋子、兼古隆司、川田学、河村恵美、川本真弓、北村敬子、喜多裕子、木下知二、木村真由美、木村礼子、熊取谷貴司、後藤奈保美、小林美幸、小林裕子、佐賀俊司、桜井真弓、佐野郁子、重田悦子、清水あゆ子、清水恵美、清水清之、清水千春、杉本信吾、鈴木竜司、住田吉儀、高橋秀典、高山純一、高山武、瀧川秀忠、竹田博美、伊達佳代、塚本陽子、津田美智子、中尾真弓、中島恵美子、中谷忠稔、中本徹、夏原宜左子、西浦次次、八田美代子、東田快子、日高貴史、平野毅、福田有里子、藤井洋子、丸山真貴子、宮島司、百合藤厚子、吉田裕彦が、第22次調査には、山村然三、松本健太郎、星川孝司、山本健一郎、川野仁也、組島慎也が調査補助員として従事した。
3. 本書第4章では、池崎と松田がそれぞれの担当調査区の結果について記載し、その他は両者で執筆・編集した。第22次調査の遺物写真は池崎による。
4. 第13次調査の基準点設置と空中写真測量業務、第22次調査の基準点設置業務は、アジア航測株式会社に委託して行った。
5. 調査に際して多大なご理解とご協力を賜った株式会社 富士住建、医療法人 孟仁会、安西工業株式会社、株式会社島田組の方々にお礼申し上げます。

調査に至る経過

鬼塚遺跡は、生駒山西麓の沖積扇状地緩斜面、標高5～35mにあり、東大阪市箱殿町・新町・宝町・南荘町一帯に広がる。遺跡範囲内ではおもに縄文時代晩期(約3000年前)から中世(室町時代)までの遺構・遺物が見つかった。

第13・22次調査の調査地は、遺跡範囲北東部の標高26～30mに位置し、東大阪市南荘町132-1, 132-10・14・15, 143-1にあたる。第13次調査前には、伸線工場が撤去された空き地になっていた。

1990(平成2)年に同地で株式会社 富士住建が共同住宅建設を計画したが、これによって破壊される埋蔵文化財の発掘調査について、同社と東大阪市教育委員会との間で協議がもたれた。その結果、敷地面積17000㎡のうち、建物建設によって地表下の遺構が破壊される5651㎡の領域を対象に発掘調査を行うことになり、同社から委託を受けた財団法人 東大阪市文化財協会が第13次調査を行った。しかし発掘調査完了後、共同住宅は建設されず、その後しばらく土地管理者によって残土処分場として利用されていた。

2001(平成11)年、当地で医療法人 孟仁会によって老人施設建設が計画されたが、施設の建物範囲のうち1115㎡が、第13次調査での未調査範囲にあたることから、教育委員会との協議の結果、同会が発掘調査を文化財協会に委託して実施することになった。

本報告書では、これら2つの発掘調査領域で検出された遺構をまとめて報告するとともに、第22次調査で出土した遺物について述べる。第13次調査で出土した遺物については、すでに刊行された「鬼塚遺跡第13次(遺物編)発掘調査報告」(福永・津田1999)を参照されたい。



図2 鬼塚遺跡第13次・第22次調査地とこれまでの調査地の位置図。番号は調査次数。



図3 鬼塚遺跡北西部の上空から撮影した調査地周辺の空中写真。東向きに撮影。生駒山地西斜面と額田谷(左)、豊浦谷(右)の扇状地縦斜面。



図5 鬼塚遺跡第13次調査地の空中写真。
a: B, C, D区調査中。北向きに撮影。b: A区調査中。南向きに撮影。



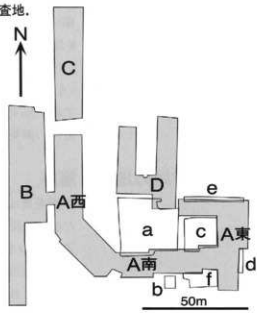
図6 第13次調査開始直後の調査地。B区北部から南東向きに撮影。



図4 北西上空から撮影した鬼塚遺跡と生駒山地、中央のマンションは図7のものと同じ。画面左半分は図3の領域と同じ。



図7 第22次調査前の状況。西向きに撮影。右上、樹木の周辺が額田斎場、南のマンションの場所は第11次調査地。図8 第22次調査前の状況。東向きに撮影。正面マンションの場所は第18次調査地。



■ 第13次調査区
□ 第22次調査区

図9 第13次、第22次調査の地区割略図。

図8 第22次調査前の状況。東向きに撮影。正面マンションの場所は第18次調査地。

地区割と調査経過

第13・22次発掘調査地の地区割図を図9に示す。

第13次調査では、調査範囲はA区(調査地南東部、南辺、西部中央寄りにまたがる2761m²、A東区、A南区、A西区に区分)、B区(調査地西辺の2071m²)、C区(北部の614m²)、D区(A区の北西に隣接する794m²)に分かれた。各区とも盛土、撿乱土を平均1mの深さまでバックホウで掘削したのち、井戸などの深い遺構以外は0.2～1mの深さで遺構・遺物を含む堆積層を人力掘削した。

A区は1990年(平成2年)7月中旬に機械掘削を行い、8月から人力掘削を開始した。平成3年2月初旬に調査が終わった。同年12月にはA区の調査と並行して、B区の機械掘削を行い、1991年1月初旬に人力掘削を始めた。B区の調査途中で、共同住宅建設工事の都合により、B区の調査を一時中断し、C・D区の調査を先に行った。両地区では、1991年1月中旬に機械掘削および人力掘削を始め、D区は5月中旬、C区は6月中旬に調査を終了した。B区はC・D区の調査期間の後半、3月中旬より調査を再開し、10月下旬に終了した。

第22次調査範囲は、a～fの6区に分かれる。a、c区は第13次調査A区とD区に挟まれた領域で、b区はA南区の南、f区はA東区の南西、d区はA東区の東南寄り、e区はA東区の北辺にそれぞれ隣接する。

同調査では調査対象部分全域を並行して調査する予定だったが、残土処分場の確保や周辺対策が遅れたため、まず調査範囲の西半にあたるa、b区の調査を1999年(平成11年)5月に始めた。バックホウによる機械掘削は、平均約2mの深度で、多量の盛土、廃棄物を除去することになり、予想を越える日数を要した。人力掘削は深い部分で1.2m行い、残土は東側の未調査部分に仮置きした。両地区の調査は同年8月に終了した。

その後、東半のc～f区の調査を継続できなかったため、一旦現地から撤退し、約1か月後の9月からこれらの調査区で掘削を再開した。機械掘削終了後は、深い部分で約1.2mの人力掘削を行った。残土は調査の終わった西側に仮置きした。これらの地区の調査は1999年11月に終了し、その後、現地の記録と出土遺物の整理を行った。

調査地の地形と層序

調査地は、東方の生駒山地西斜面を流下する額田谷の土砂流出によって形成された扇状地緩斜面にある。調査地北部(B区北端～C区南半)と、調査地南側の隣接地(南辺より30から100mの範囲、鬼塚遺跡第11次調査地)には、深さ4～7m、幅40～50mの埋没開析流路が、東西にのびる。この2本の流路は、弥生時代にはすでに開析されており、埋積されながら中世まで存続し、その後も細い水路として残存したと考えられる。空中写真でも、隣接地より一段低く東西に帯状にのびる部分として判読される。調査地の大半は、これらの谷地形に挟まれた、南北約150m幅の西向き緩斜面に含まれる。このような地形の表層数mは、1万数千年前の更新統最上部に相当すると考えられる砂質泥～砂礫層からなり、俗に「地山」とよばれている。

2本の開析谷に挟まれた緩斜面は、ごく緩やかな凸型をなし、南北の横断形では、調査地の中央部ほどわずかに高い。また、谷壁の近傍は谷筋に向かってさらに傾斜している。調査区の南辺では、このような斜面がみつめられた。

「地山」を覆う発掘対象となる地層は以上の地形の起伏を平坦化するかたちで累重

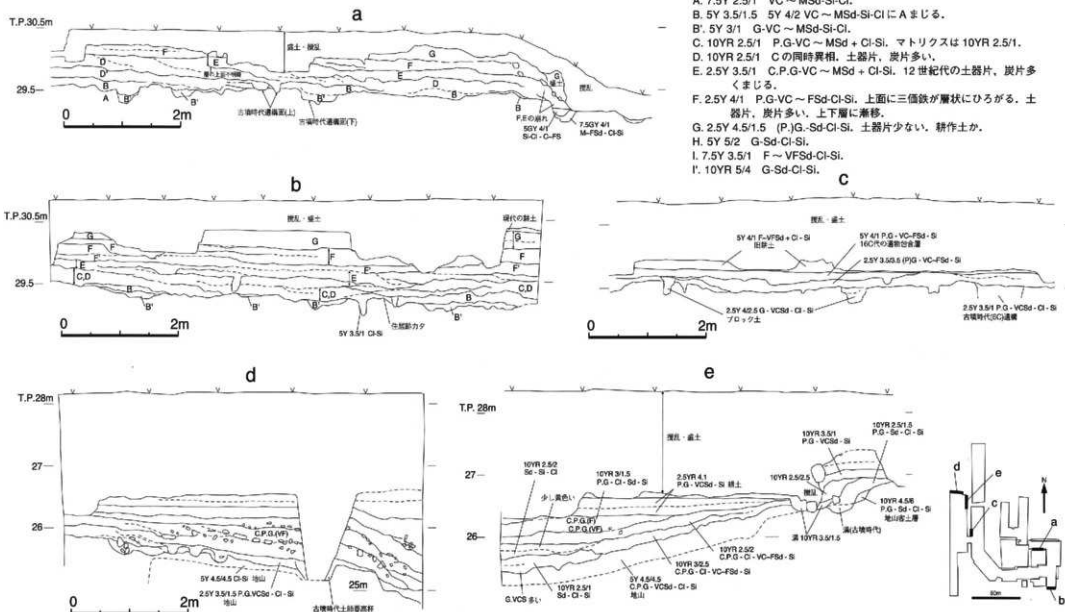


図 10 第 13 次調査, A, B 区の堆積層断面図。a: A 区北部, 東西断面。b: A 区南端, 東西断面。c: A 区中央部西辺, 南北断面。d: B 区北端東西断面。e: B 区北端部東辺, 南北断面。d, e の基底は開析流路左岸側壁の一部。堆積物の粒径は, C: 大礫, P: 中礫, G: 細礫, VCsd: 極粗粒砂, Csd: 粗粒砂, MSd: 中粒砂, Fsd: 細粒砂, VFSd: 極細粒砂, Si: シルト, Ci: 粘土で表す。混合堆積物は, たとえば Sd-Ci-Si 砂質シルト質粘土などとする。色調はマンセル色体系の表記による。

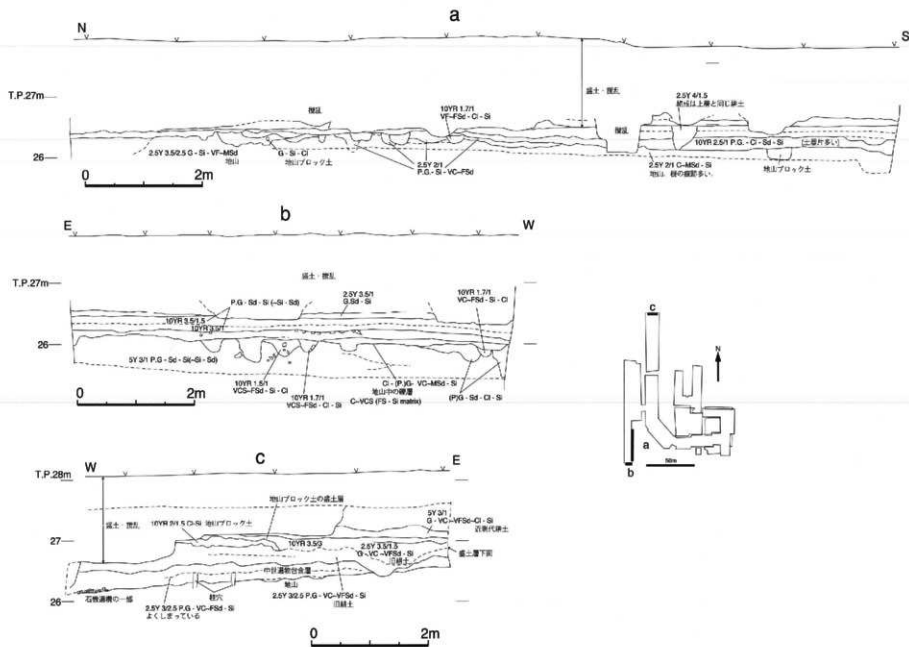


図11 第13次調査、B、C区の堆積層断面図。a: B区南部東辺南端、南北断面。b: B区南端、東西断面。c: C区北端、東西断面

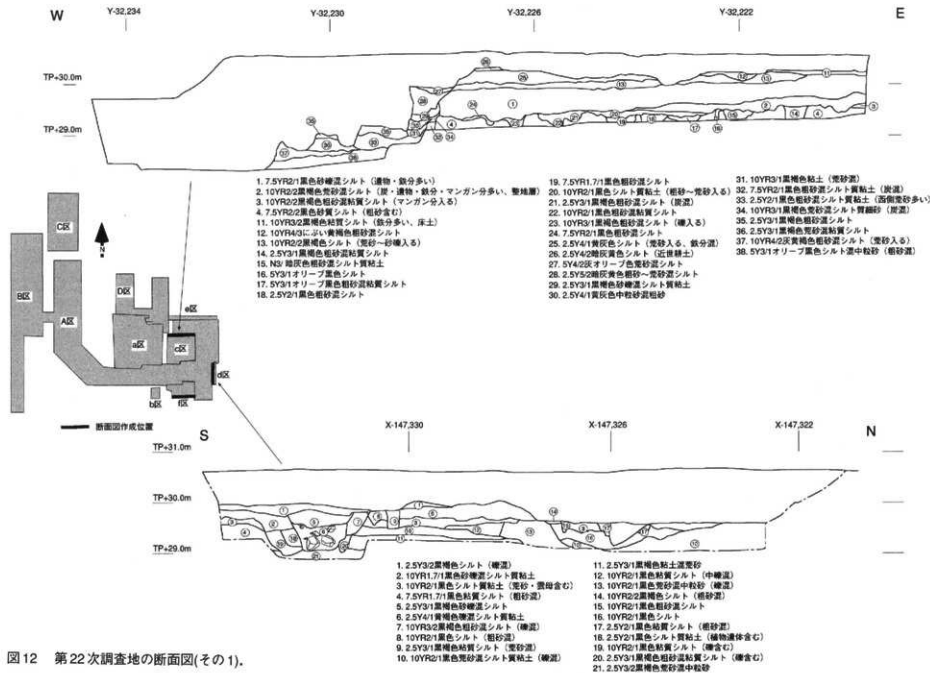


図12 第22次調査地の断面図(その1).

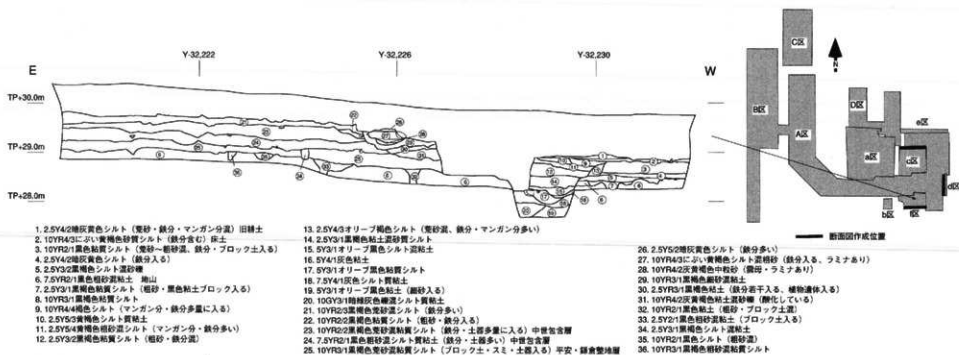


図13 第22次調査地の断面図(その2).

している。その層厚は開析谷の近傍で侵食された部分は厚く1.2mを越し、谷筋から隔たった中央部では薄く、1m以下である。

後述する古墳時代以後の、集落や耕作地の形成に際して、下位層準の遺構は破壊され、地山を含むそれ以前の堆積物は、削平・擾乱されて、斜面の下方あるいは上位層準に再堆積したり、運び去られて存在しない。また、中世末期から近世初頭に耕作地が階段状に造成されたため、切土された部分では、深く掘り込まれた遺構以外は残存しない。第13・22次調査区のうち、A西区東辺、A南区東辺(c、f区西部)はこのような部分にあたり、遺構の分布密度は低い。また、工場施設があった領域も基礎や貯留槽などの深い掘削を伴う部分だけでなく、建物の下全体が削平されており、遺構分布密度の低い矩形の領域が生じている。

以上のような、中世以後の土地改変による削平を免れた領域では、下位より、「地山」「古墳時代遺物包含層」「奈良-平安時代遺物包含層」「平安-鎌倉時代遺物包含層」「室町時代遺物包含層」「近世-近代遺物包含層」「現代の盛土」がみとめられた。これらは、堆積物の岩相区分でも、土壌層位でもなく、現地の堆積相断面では、下位層が上位堆積物の堆積時に切られた面を識別し、出土遺物の相対年代によって便宜的に区分された垂直範囲を指す。岩相、断面での形状などは、図10～13に掲げた断面図を参照されたい。

調査の結果

以下に第13・22次発掘調査で検出された古墳時代以後の遺構と第22次調査で出土した遺物を各時代・時期ごとに記載する。遺構の位置は図XX(付図)に示した。第13次調査で検出された遺構の番号は、1桁から順次付番し(たとえば土壌1、2、3)、第22次調査で検出された遺構の番号は先頭に「20」を付けて区別した(たとえば土壌201、202、203)。

第13次調査では早期の押型土器、晩期の長原式土器などの土器片と石鏃、石匙などの石器がわずかに出土したが、遺構は見つかっていない。また、弥生時代の遺構・遺物もみとめられなかった。

古墳時代の遺構

後世の削平によって、遺構の分布範囲は偏るが、ほぼ全域で有機物に富み、土器片や炭片を含む堆積物で埋まった遺構が検出され、出土遺物の相対年代から、古墳時代中期末から後期前半にかけて集落が展開していたことがわかった。

D区

D区南東部では、出土遺物から古墳時代中期末から後期前半の竪穴住居跡、ピット、溝などが検出された。これらは、近代の盛土、耕作土層の直下で検出され、上部がかなり削平されていた。

竪穴住居跡1

竪穴住居跡1は南東部北寄りで検出された。幅0.25m、深さ5～10cmで、南北幅約4.5mの隅丸方形にめぐり、床面の外周溝が検出された。東の一部は調査区外に出る。2つの隅の外側に各1つ、外周溝の内側に桁を支える柱跡と思われるピットが3つ検出された。外周溝の方位は直交座標軸に対し、約6°右回転。

竪穴住居跡2

竪穴住居跡2は竪穴住居跡1から南西に約5m離れた場所で検出された。南北5m、東西6.5mのやや不整な隅丸方形にめぐり、床面の外周溝と、その四隅の内外に2～4

個ずつ集まったピットが検出された。溝の内側では、多数のピットが検出されたが、溝寄りに分布するものに注目すると、長辺(東西)方向には2間、短辺方向には3間の配列があるように見える。外周溝各辺はほぼ直交座標軸にのる。

その他

D区南東部では、竪穴住居跡のほかに、比較的小さなピットが多数検出されたが、工場の油で変色していたため、不確実なものが多い。

A 東区, A 西区

A 東区では、中・近世以後の耕作地造成に際して切土された東辺(およびd区)以外で、古墳時代の遺構が散見された。とくに、北部の切土されていないもの緩斜面部分、南部の開析流路に向かって低くなる緩斜面部分ではこの時代の遺構分布密度が高かった。

竪穴住居跡3

北部には、おおむね隅丸方形にめぐる幅25～40cm、深さ5～20cmの溝と、その内側に分布する長径60cm以下、深さ30cm以下のやや大ぶりのピットから、竪穴住居跡3とした遺構がある。この遺構の南の一部は、調査区外に出ており、全形は確かめられなかった。縁辺の溝はほぼ直交座標軸にのる。

竪穴住居跡4

本調査区南西部の竪穴住居跡4とした遺構は、調査区南端から北北西に4.5mのび、弧状に西に屈曲して消失する、幅20cm、深さ5cm以下の溝で、住居跡の一部が残存したものと考えられる。家屋内と想定される屈曲の内側と南北直線部の中途にピットがともなう。f区の竪穴住居跡201とは東西方向に並ぶ位置にあたる。

なお、これらの竪穴住居跡のほか、c区とf区に挟まれた中程の積面で1辺約5mの方形の変色部分があった。竪穴として掘削したが、不確かである。

掘立柱建物跡20, 21

本調査区中央部北東寄り、掘立柱建物跡が2ないし3棟分検出された(掘立柱建物20)。ほぼ南北方向の棟行で、2×3間ないしは2×4間。棟行の柱間は約1.8m、桁行の柱間は1.4m。南西隅に想定される柱穴が攪乱のため確認できない。柱列の方位はほぼ直交座標軸にのる。この建物跡は、奈良-平安時代の遺構の可能性が高い。この建物跡と一部重複し、北北東に棟行をもつ、2×3間程度の掘立柱建物跡の一部(21)が検出された。柱間は2m前後。柱列の方位は約18°右回転。

掘立柱建物跡22

竪穴住居跡3の北側(e区との隣接部分)と竪穴住居跡4の東から北側にかけては、ともに古墳時代後期のものと考えられるピット群が検出された。これらの中にはほぼ東西方向に棟行をもつ1×2間分の掘立柱建物跡がみとめられた。柱間は1.8m。他のピットも建物を構成していたと考えられる。柱列の方位は直交座標軸にたいして約2°左回転。なお、A西区北部でも上位から掘り込まれた奈良-平安時代の遺構にまじって、古墳時代後期の土器片を含むピット群が分布していた。

B, C区

溝84a, 84b, 83, 79, 80, 81, 82

B区中央部で東西方向の数本の溝(北から溝84a, 84b, 83, 79, 80, 81, 82)がみとめられた。検出面では、ともに調査区の東に向かって浅く、幅を減ることから、もとは西向き斜面の傾斜方向にほぼ同じ深さでのびていたと考えられる。溝84a, 84b, 83は幅0.3mまでで深さは数cm。溝79は、幅1.2m、最大深0.35mであった。南側の

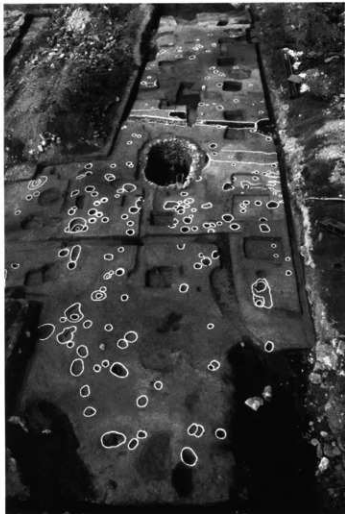


図14 D区東半部、古代～近世のピットを主とする遺構の検出状況。トレンチ手前の幅約11m。北向きに撮影。



図15 D区南東部、古墳時代の竪穴住居跡2。北北西向きに撮影。



図16 D区南東部、古墳時代の竪穴住居跡1。北西向きに撮影。

図17 A東区北部、古墳時代の竪穴住居跡3。画面左右の幅約11m。南西向きに撮影。

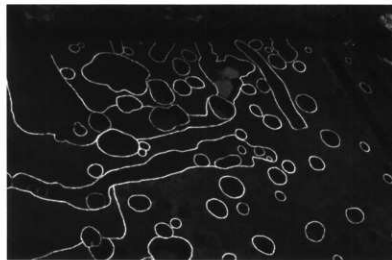


図18 A東区南端部、竪穴住居跡4の一部と考えられる古墳時代の溝。北西向きに撮影。左端から周溝の隅まで約4.2m。



図19 A東区中央部のピット群。掘立柱建物跡20,21の柱穴を含む。南向きに撮影。(スケール)

溝80～82は一組の溝遺構をなし、最大幅4.5m、最大深0.45mで、中央の一段深い溝81の両側が堤状の掘り残しで仕切れられ、その外側に浅く狭い溝80、82が並行する遺構であった。中央部の深い部分では、ピット状の窪みを多数検出したが、これらは、足印、ブロック土、その他の擾乱構造を区別せず検出した結果である。これらの溝は、出土遺物から、6世紀初頭の遺構と考えられる。

土壌2

B区南部では、同時期の土壌2が検出された。隅丸方形で、幅約0.8m、深さ0.35m。南半部は近代に破壊されている。有機物に富み、炭片を多く含む砂礫質シルトで充填され、古墳時代後期の須恵器片が出土した。

埋没開析流路

B区北端およびC区南部ですでに述べた埋没開析流路(「遺物編」にいう「川」)を検出した。谷地形の外側両縁辺の幅は約25m。C区の南部では、両縁辺が検出された。また、D区北端でも谷地形の南縁辺がみとめられ、西北西～北西方向に調査地を横切り、調査地の北西に隣接する額田墓地の方にのびていた。墓地は現在でも幅約100mの谷状の凹地で、調査地の北側にみとめられる開析谷との合流点らしい。B区北端部では、谷壁の最上部とこれを覆う古墳時代から近代までの堆積層がみとめられた。これらのほとんどは、南側の平坦面からの再堆積物で、流路上流から水流によって運搬されたことを示す堆積構造はみとめられなかった。「地山」からなる谷壁の上には古墳時代前期の庄内式、布留式土器をわずかに含む地層が薄く載り、その上位には古墳時代後期の遺物包含層が分布した。同層からは、6世紀初頭の須恵器、土師器の破片とともに、鋳造に用いられたトリベが出土した。これらの地層の下面には、不明瞭なピットが数個ずつ分布していた。C区中央部にあたる北側の谷壁上部は、後述する中世の遺構形成で改変されていた。同区南部の谷の中は近・現代の廃棄物で埋まっていた。

なお、この開析流路は古墳時代前期には埋積期にあたり、流路が下刻されたのはより古い時期で、縄文時代晩期頃の可能性が高い。

C区

南端部の埋没開析流路縁

C区の北東隅の中世以後の耕作土層の下位で、「地山」上面が東西4m、南北3.5mの範囲で北東側に斜面をなして約2m落込み、ブロック土で充填されていた。上述した開析流路の谷壁斜面の一部と考えられる。この落込みの底で、布留式期の小型丸底甕、甕などの土師器が礫とともに、直径約1mの範囲にまとまって出土した。

F区

竪穴住居跡201

南端部分で竪穴住居跡201に伴うと考えられる溝およびピットを検出した。溝はL字を呈しており、両端部分はトレンチの南方および西方外側に広がるため全体の規模は不明である。検出規模は南北3m、東西2.5m、幅0.4m。上面は削平されており深さは0.05mを測る。炉跡は見つからなかった。溝に区画された内側の部分には、直径約0.2mのピットを検出した。

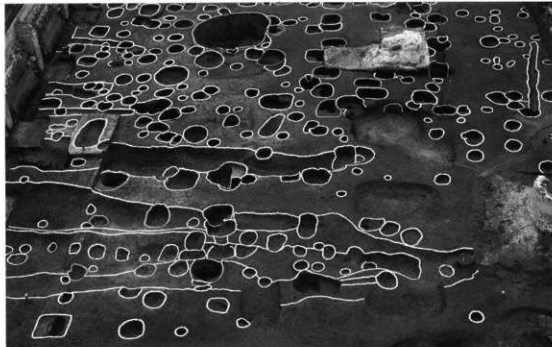


図20 B区中央部西寄り、古墳時代の溝79~82。画面左右の幅約16m。北向きに撮影。



図21 B区中央部西寄り、溝79内の礫と土器の出土状況。a: 南西向きに撮影。スケールは2m。b: 写真aの手前の集積を北向きに撮影。

図22 B区北端部、埋没開析流路南縁部の斜面。東向きに撮影。スケールの長さ約1.8m。



図23 開析流路縁の堆積層から出土した古墳時代のトリベ。スケールの文字の高さ5cm。



図24 C区南端部、古墳時代前期の遺物をともなう開析流路の谷壁斜面、南南西向きに撮影。スケールは約50cm。



図25 f区で検出された古墳時代の竪穴住居跡。西向きに撮影。

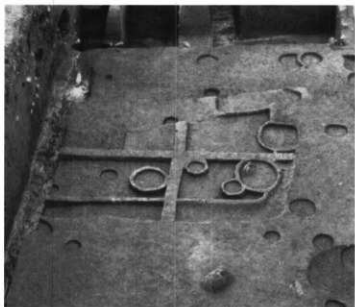
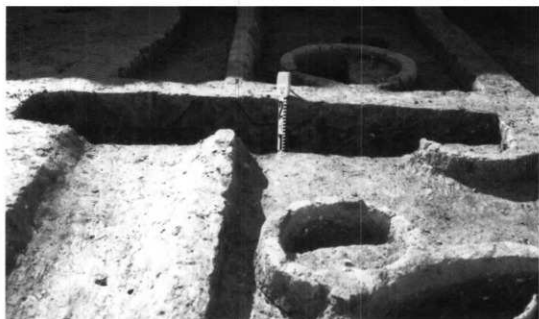


図26 f区竪穴住居跡の東西断面。南向きに撮影。



奈良・平安時代の遺構・遺物

8世紀後半から9世紀初頭の井戸、掘立柱建物跡などの遺構とこれらに伴う遺物が、おもにB区、A西区中央部、a、f区で検出された。これらは地方官吏の業務および居住域を構成していたものと考えられる。

この時期の遺構が分布しない領域のほとんどは後世の削平、擾乱がおよんだものと考えられるが、B区北西部では、より南の遺構密度の高い部分と同様の埋没条件と考えられるにもかかわらず、開析流路までの間で遺構分布密度が低くなっている。また、開析流路北側のC区北半では、中世以後の削平を受けたとはいえ、この時期の遺構・遺物が皆無に近い。これらのことは同時期の建物分布範囲の北限が、この開析流路の左岸までであったことを示唆する。

同時期の井戸は第13・22次調査区全体で5基検出され、このうち3基には井戸枠が残存していた。以下の井戸枠(井戸側)の構造と各部の呼称は宇野(1982)におおむね従う。

A西区

A西区中央部の西辺からB区にまたがるトレンチで、井戸2、井戸3が検出された。後者の掘方上部の北西隅から西辺にかけては、前者の掘方に切られていた。遺構のもっとも新しい充填堆積物には、前者は9世紀初頭、後者は8世紀末の遺物が含まれていた。ともに井戸側が残存し、これらの構造は、宇野(前掲)によると、4本の「隅柱と裏込め土の間に横板を挟む」「横板組隅柱どめ」(BV・b類)に属する。ただし、横板最下段の内側には、隅柱の基部を固定する枠組みをともなう(以下、基礎枠と呼ぶ)。丸太ないし角柱状にわずかに面取りした材を相欠きして井桁状に組み、交差部を貫通するほぞ穴に隅柱基部に削り出したほぞを挿入したものである。最下段の横板の外側にはさらに材を当て、礎を掘方の壁面との間に挟んで、井戸側の位置を固定した部分がある。基礎枠の四隅の下には、小型の巨礫大の根石が設置されていた。枠内の掘方の底には、椀状に窪む水溜めが掘られていた。

井戸3

検出面での掘方上面は1辺約2.7mの隅丸方形で、検出した深さは約2.8mだが、後述する井戸2の検出面からの深さは3.4m。掘方の基底では、やや丸みをもち、幅1.9mに狭まる。水溜の深さは約15cmであった。検出面より2.3mの深さまでは、井戸側の破壊後に落ち込んだ堆積物で充填されており、この下位で井戸側が検出された。井戸側の外幅は約1.3mで、約1mの高さまで横板が積み上がった状態で残存していた。横板の最下段は、基礎枠の上段にめぐり、南北の対辺は井桁材の外側面に当てられ、東西対辺は下段の井桁材の上に載った状態になる。

四隅には交差する丸太を貫通する円筒形のほぞ穴が穿たれ、隅柱が立っていたことを示していた。残存する井戸側の内部には上部に組まれていた横板が落ち込んでいた。井戸が放棄された際に隅柱が抜き取られたためと考えられる。

横板の長さは、基礎枠のほぞ穴から推定される隅柱芯間の距離を上まわるが、外法未満のものがほとんどであった。横板の幅は不揃いで、12～40cm。このことは、井戸側階段面の横板の長さ規制されず各面の横板が組み上げ得ることを意味する。

掘方の最下部、深さ約35cmの裏込め土には、中礫が多量に混ぜ込まれていた。掘方壁面の同一層準にも、おもに砂礫からなる湧水層がみられ、その砂礫を掘方掘削時に取り除けておき、再利用したものと考えられる。

図27 奈良-平安時代の井戸2, 3. A区中央部西辺からB区への拡張部, 南向きに撮影, スケールは2m.



図28 井戸3の掘方の断面と井戸側残存上部の検出状況. 東向きに撮影, スケールの長さ約1.15m.



図29 井戸3の井戸側残存上部の検出状況. 南西向きに撮影.



図30 井戸3の井戸側残存上部. 北向きに撮影.



図31 井戸3の井戸側基礎砕石. 南向きに撮影.



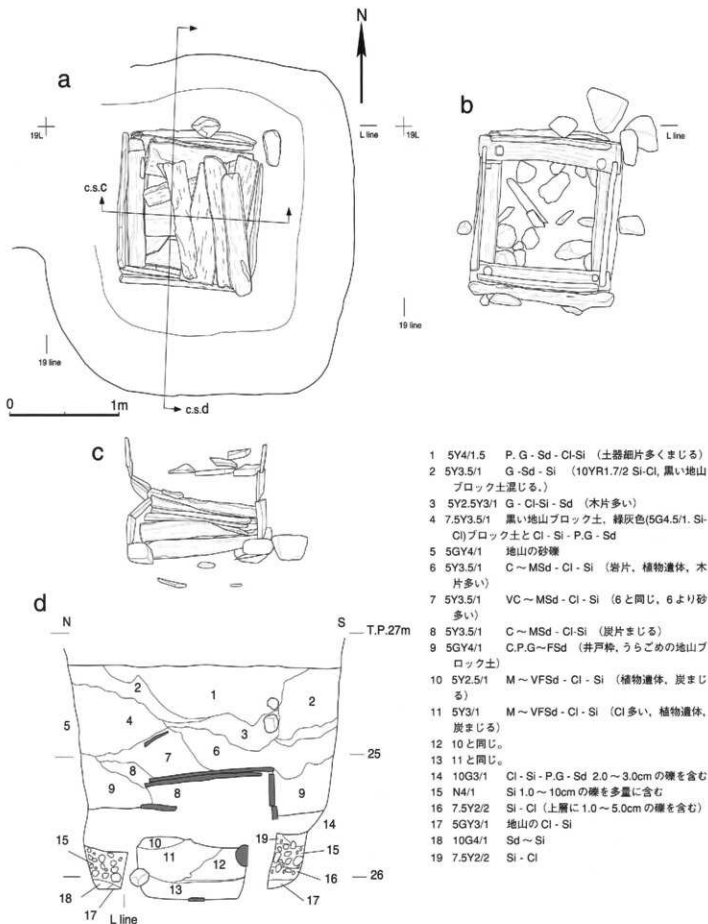


図32 井戸3の掘方と井戸側の平面・断面図。a: 掘方と井戸側検出状態の平面図。b: 基底枠の平面図。c: 井戸側北半を見通す縦断面図。d: 南北方向の堆積層断面図。

- 1 5Y4/1.5 P-G-Sd-CI-Si (土器細片多くまじる)
- 2 5Y3.5/1 G-Sd-Si (10YR1.7/2 Si-CI, 黒い地山ブロック土混じる。)
- 3 5Y2.5Y3/1 G-CI-Si-Sd (木片多い)
- 4 7.5Y3.5/1 黒い地山ブロック土, 緑灰色(5G4.5/1. Si-CI)ブロック土とCI-Si-P.G-Sd
- 5 5GY4/1 地山の砂礫
- 6 5Y3.5/1 C~MSd-CI-Si (岩片, 植物遺体, 木片多い)
- 7 5Y3.5/1 VC~MSd-CI-Si (6と同じ, 6より砂多い)
- 8 5Y3.5/1 C~MSd-CI-Si (炭片まじる)
- 9 5GY4/1 C.P.G~FSd (井戸枠, うらごめの地山ブロック土)
- 10 5Y2.5/1 M~VFSd-CI-Si (植物遺体, 炭まじる)
- 11 5Y3/1 M~VFSd-CI-Si (CI多い, 植物遺体, 炭まじる)
- 12 10と同じ。
- 13 11と同じ。
- 14 10G3/1 CI-Si-P.G-Sd 2.0~3.0cmの礫を含む
- 15 N4/1 Si 1.0~10cmの礫を多量に含む
- 16 7.5Y2/2 Si-CI (上層に1.0~5.0cmの礫を含む)
- 17 5GY3/1 地山のCI-Si
- 18 10G4/1 Sd~Si
- 19 7.5Y2/2 Si-CI

深さ2.3m以上に充填された埋め戻しの堆積物には、土壌化した堆積物のブロック、炭片や灰、土器の細片が多くみとめられた。それらの混在の程度や、堆積物の粒度の違いから判断される堆積単位は数10cmの土塊で、不規則に累重しており、井戸の放棄とともに、ほぼ一時に埋め戻されたと考えられる。

井戸側の堆積物と裏込め土からは、土師器の坏・壺・椀・高坏・甕・羽釜・甕、須恵器の皿・坏などの土器、曲物底板が出土した。

なお、掘方に近接した南北両側に2個1対と思われるピットが検出され、これらを結ぶ線はほぼ井戸側の中央を通る。地上に釣瓶などのための懸架構造があったかもしれない。

井戸2

井戸2は、井戸3の放棄・埋め戻し後、その南西隣に掘削された井戸である。検出面での掘方上面は約4.2×4.5mの隅丸方形だが、後述するように井戸放棄後に掘り直されており、もとの大きさは1辺3m前後であったと思われる。深さ4.6m。掘方の基底は1辺約2mであった。水溜めの深さは30cm。基礎枠をとまう横板組隅柱どめの井戸側が残存していた。

残存高2.5m前後の隅柱の内側2側面には、基礎枠の上面から0.65mと1.95mの高さに、ほぞ穴が穿たれ、井戸側内壁に沿ってほぼ水平に横棧が渡されていた。横板は、基礎枠の側面から、高さ約2mまで、11～13枚積み上げられた状態で検出された。板の幅は10数cmのものがほとんどで、井戸3の横板にくらべると比較的そろった印象がある。一方、長さは不揃いで、隅柱の外法を数cm下まわるものから、20cmほど上まわるものまであり、長い横板の側面に短い板の木口を当てた組み方になっている部分が、散見された。横板の水平方向の巡り方にはとくに規則性はない。

裏込め土は、掘方の底から約2.2mまでは、掘方掘削時に生じた砂礫まじり粘土質シルトのブロック土を充填し、いったん平坦面をつくってその上位により細かくこなれたブロック土をほぼ水平に積み重ねている。図示していないが、井戸3にみられた籬層の造作はみとめられなかった。掘方壁面の砂礫からなる湧水層は検出面下約3.5m付近にあり、井戸3よりも水深があったと思われる。

残存した井戸側の最上部にあたる層準では、ほぼ直立した大小の板材が、井戸側の東面外側の裏込め土に並べて埋めこまれた状態で見つかったほか、掘方南東隅には、細い棒材を添わせて埋めこまれた直径約15cmの柱根状の丸太材が残存していた。また、井戸側の一部を覆う形で、直径3～4cm、長さ1m前後の棒材が20本前後まとも検出された。このほか、もとは直立していたと思われる部材が2、3みられた。これらの木材は、井戸の地上部分に井桁(あるいは井筒)と、覆屋があったことを想像させる。

井戸側内の水溜めの底から約1mまでは有機物に富む泥が、その上位の約1.9mまでは数枚の砂の葉層を挟む砂質泥がみとめられ、井戸が使用されなくなった後、水面下に砂泥が累重する期間(数か月のオーダーか?)放置されたことを示す。これらの上位では、ほとんど塊状で不規則な層理をなす、有機物に富む砂質泥が堆積しており、その上位では、上述したような倒壊、あるいは破壊されて生じたような部材と近傍から運搬され再堆積したと思われる、わずかに土器片、礫などを含む砂質泥のブロック土がおもに掘方と井戸側の間に分布した。このことは、放置された後、掘方が再び掘削されて地上の構造と、井戸側の上部の横板が解体され、井戸側の残余の空間が埋められたことを示す。検出面ではこの穴の掘方を認識していたことに



図33 A西区中央部西壁にみられる奈良-平安時代の井戸2上部の堆積層断面。スケールは約1.15m。



図34 井戸2放棄後に形成された穴に投棄された土器片の出土状況。a: 隅柱の腐朽した先端だけが見える層準。土器片の分布の左(北)側は井戸側内面の輪郭に沿って直線的だが、向う(東)側ははみ出している。横板はなく、この層準の直下まで井戸側が破壊されたと考えられる。b: 投棄された土器片を含む堆積層の下底と、井戸側の部材の破壊された状況。西向きに撮影。



図35 井戸2、残存した井戸側上部の検出状況。南東方向に撮影。スケール1目盛20cm。



図36 残存した井戸側上部の内側を少し掘り下げた状態。図44の断面図の堆積層9、10の層準で、この出土遺物も井戸放棄後のごみである。

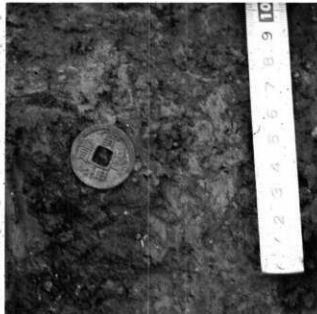


図37 井戸2、井戸側残存部の上部から出土した「富寿神寶」。



図38 井戸2、上部の擾乱された部材と裏込め土を除去した状態。横板・掘り方の支柱は発掘作業の小細工。南東向きに撮影。

図39 井戸2の基礎枠。北向きに撮影。外側に最下段の横板を残す。スケールは約1.15m。右方向に続く溝は、作業のための排水溝。



図40 井戸2の基礎枠四隅の下に設置されていた根石と中央の水溜め。西向きに撮影。

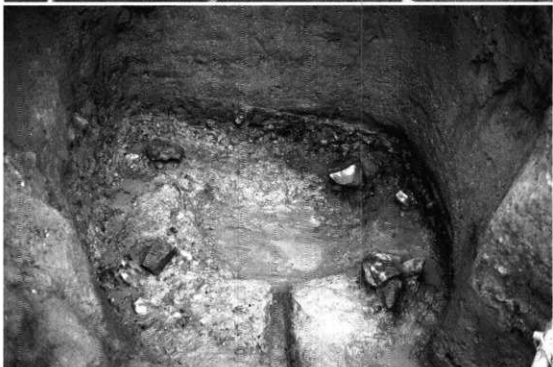


図41 井戸2. 掘方の断ち割り状況。西向きに撮影。左に井戸3の掘方の一部が残る。

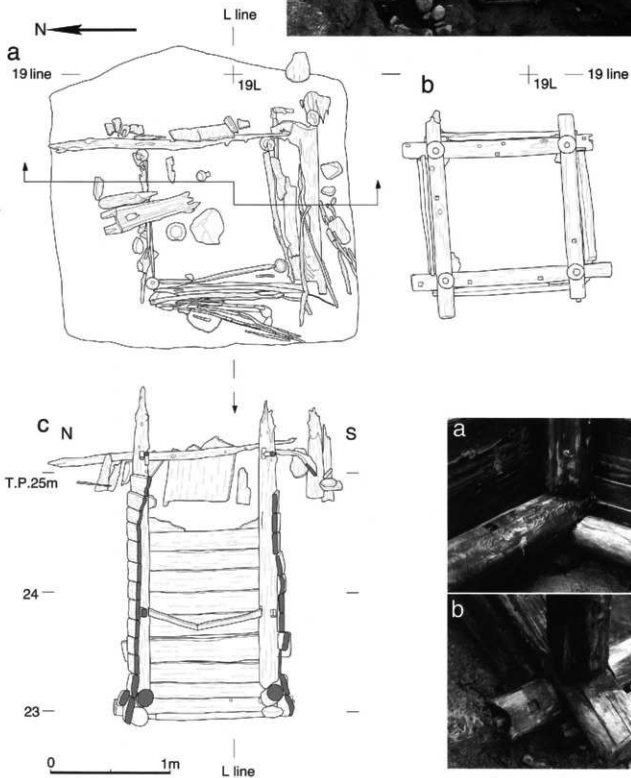


図42 井戸2. 井戸側の平面・断面図。a: 井戸側検出上面の平面図、b: 基礎枠の平面図、c: 東半を見通す縦断面図。

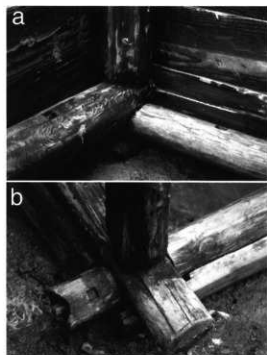
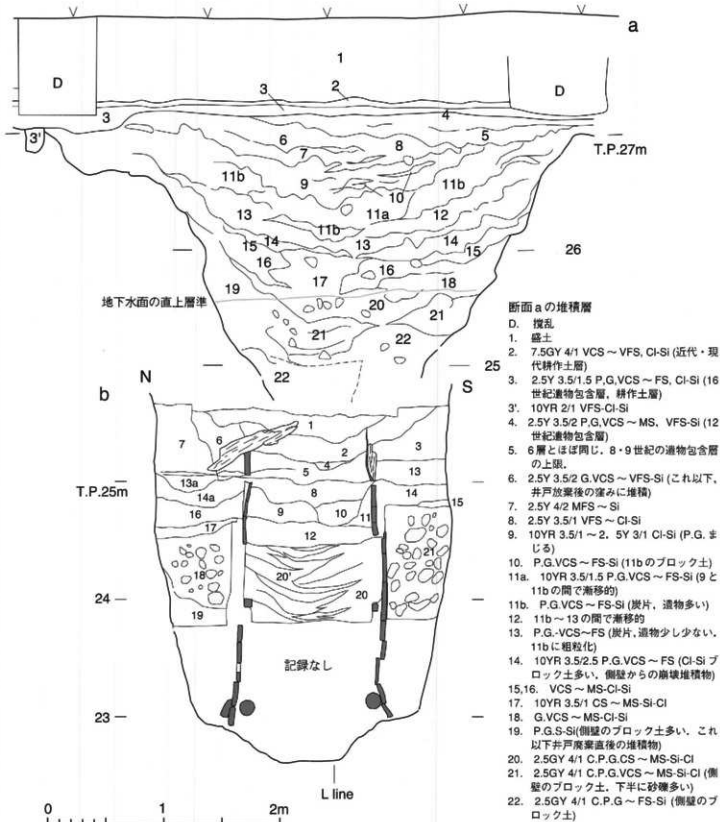


図43 井戸2. 隅柱基部と基礎枠の結合部分。a: 内側、b: 横板を除去した外側。



- 断面aの堆積層
- D. 攪乱
 - 1. 盛土
 - 2. 7.5GY 4/1 VCS ~ VFS, CI-Si (近代・現代耕作土層)
 - 3. 2.5Y 3.5/1.5 P.G.VCS ~ FS, CI-Si (16世紀遺物包含層, 耕作土層)
 - 3'. 10YR 2/1 VFS-CI-Si
 - 4. 2.5Y 3.5/2 P.G.VCS ~ MS, VFS-Si (12世紀遺物包含層)
 - 5. 6層とほぼ同じ, 8・9世紀の遺物包含層の上層。
 - 6. 2.5Y 3.5/2 G.VCS ~ VFS-Si (これ以下, 井戸放棄後の窪みに堆積)
 - 7. 2.5Y 4/2 MFS ~ Si
 - 8. 2.5Y 3.5/1 VFS ~ CI-Si
 - 9. 10YR 3.5/1 ~ 2. 5Y 3/1 CI-Si (P.G.まじる)
 - 10. P.G.VCS ~ FS-Si (11bのブロック土)
 - 11a. 10YR 3.5/1.5 P.G.VCS ~ FS-Si (9と11bの間で漸移的)
 - 11b. P.G.VCS ~ FS-Si (炭片, 遺物多い)
 - 12. 11b ~ 13の間で漸移的
 - 13. P.G.-VCS ~ FS (炭片, 遺物少し少ない, 11bに粗粒化)
 - 14. 10YR 3.5/2.5 P.G.VCS ~ FS (CI-Siブロック土多い, 側壁からの崩壊堆積物)
 - 15, 16. VCS ~ MS-CI-Si
 - 17. 10YR 3.5/1 CS ~ MS-Si-CI
 - 18. G.VCS ~ MS-CI-Si
 - 19. P.G.S-Si (側壁のブロック土多い, これ以下井戸放棄直後の堆積物)
 - 20. 2.5GY 4/1 C.P.G.CS ~ MS-Si-CI
 - 21. 2.5GY 4/1 C.P.G.VCS ~ MS-Si-CI (側壁のブロック土, 下半に砂雜多い)
 - 22. 2.5GY 4/1 C.P.G. ~ FS-Si (側壁のブロック土)

- 断面bの堆積層
- 1. 5Y2/2 Sdmx.Md
 - 2. 2.5GY2/1 Sdmx.Md
 - 3. 5G Sdmx.Md (黒灰色粘土のブロック含む)
 - 4. 5GY3/1 Si-CI
 - 5. 5Y2/1 Md
 - 6. 2.5GY2/1 Sdmx.Md
 - 7. 7.5GY2/1 Sdmx.Md
 - 8. 5Y2/2 Gmx.Si-CI
 - 9. 2.5Y2/1 Si-CI
 - 10. 5Y2/1 Si-CI (炭含む)
 - 11. 10YR2/1 Si-CI
 - 12. 5Y2/2 Sd-Md (植物遺体含む)

- 13. 5GY2/1 Sdmx.Si-CI
- 13a. 5GY2/1 Sdmx.Si-CI (地山のブロック多い)
- 14. 10Y3/1 Sdmx.Md
- 14a. 2.5GY3/1 地山のブロック
- 15. 2.5GY2/1 MS.Si-CIのブロック
- 16. 7.5GY2/1 Sdmx.Si-CI のブロック (粗い砂, 地山のブロック)
- 17. 5GY2/1 Simx.VCS-FS
- 18. 10Y3/1 CS-FSmx.CI-Si
- 19. 10G5/1 Simx.FS ~ CS
- 20. 7.5Y2/2 CI-Simx.VCS ~ FS
- 20'. 20と同じ。 MS ~ VFSmxCi-Si
- 21. 17-18のブロック土

図44 井戸2の堆積層断面図。上部(a)と下部(b)で前後に異なる断面を図化した。(b)は井戸掘方の東寄りの南北断面。



図45 A西区北部で検出された奈良・平安時代～中世の遺構。北東向きに撮影。掘立柱建物跡24を含む。トレンチの幅12m。

なる。検出面より深さ約2mの穴の中で、隅柱はなお直立しており、より上位の埋積とともに腐朽したと思われる。穴の充填堆積物(「遺物編」にいう「中層・上層」)の下部は多くの土器片を含み、有機物に富む砂質泥で充填されていた。上部のマトリクスはより砂礫がちで、遺物は少なかった。累重中には時間間隙を示す層界面はみられず、この堆積物は、ごく短期間に充填されたと考えられる。「氏」「氏氏」「田人」「万」「家」などと書かれた墨書土器を含む土師器、須恵器、黒色土器、陶器、製塩土器や瓦のほか、818年初鋳の「富寿神寶」が出土した。

掘立柱建物跡24、ピット群

A西区中央部北寄りでは、2×2間の掘立柱建物跡24が検出された。柱間は約1.5m。柱列はほぼ直交座標軸に対して約3°左回転。総柱建物の可能性があるが、柱穴の大きさが、後述するB区と同形の建物に比べて小さい。この建物跡の北側には、古墳時代のものと思われるピットがまじるピット群が分布し、建物跡は復原できないが、列をなすものが2か所のみとめられた。

B区

次に述べる土壌1、井戸1は、出土遺物の相対年代から、ともに8世紀中頃で、土壌1がより古い時期に埋まったといわれる。

土壌1

本調査区中央部北寄り、南北約3m、東西約2.5mの不整形をなす土壌1が検出された。検出面の土壌内には、土器片とともに、ほぼ一様に砂礫質シルトが分布したが、深さ数cm以下では、「地山」内の中礫を主とするシルト質砂礫層が土壌内で北東-南西方向に帯状に掘り残され、その両側、つまり土壌北西部と南東部に窪みを生じていた。窪みの最深部はともに約80cmで、割れの大きな土器片や礫を多く含む「地山」ブロック土で充填されていた。

北西部の窪みの中央は幅約70cmの範囲で搗鉢状に落込み、それを炭細片や灰のまじった砂質シルトをマトリクスとする多数の製塩土器片が充填していた。

掘方の平面形が、すでに述べた井戸2などと似ていることから、井戸を掘り始めたが、礫層に当たったためか、他の理由で掘削をやめ、ゴミ穴にした、という話ほもっともらしい。

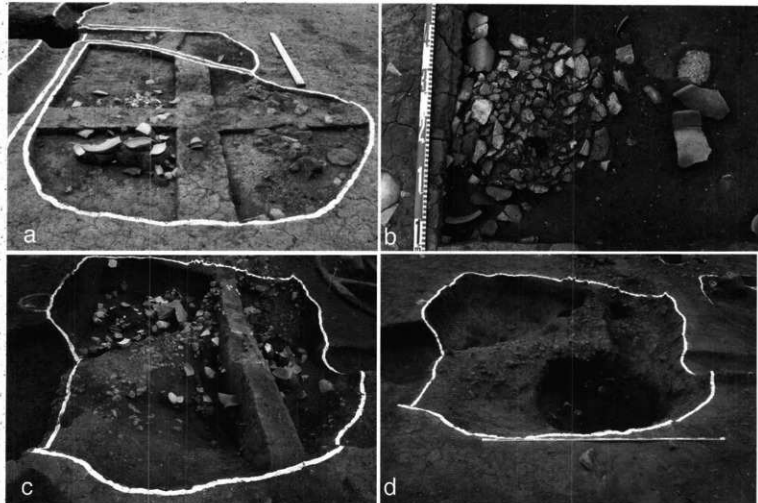


図46 B区中央部北西寄りで検出された奈良-平安時代の土坑1。a: もっとも初期の検出状況。下位層準では輪郭が変わった。左上を斜めに横切る中世の溝に注意。矢印部分の下位層準で製塩土器がまとまって出土した。西向きに撮影。スケールは約1.15m。b: 土坑北西部で見つかった製塩土器片の集積。南向きに撮影。スケールの文字の高さ5cm。c: 南向きに撮影。中央部に礫層を含む掘り残しが帯状にのびる。d: 土坑の完掘状態。南向きに撮影。製塩土器片の集積の下に、炭片、灰の多い堆積物で埋まった円形ピットが検出された。手前のスケールは2m。

図47 B区中央部西寄り、奈良-平安時代の井戸1。



図48 井戸1の底付近で出土した土師器、須恵器。



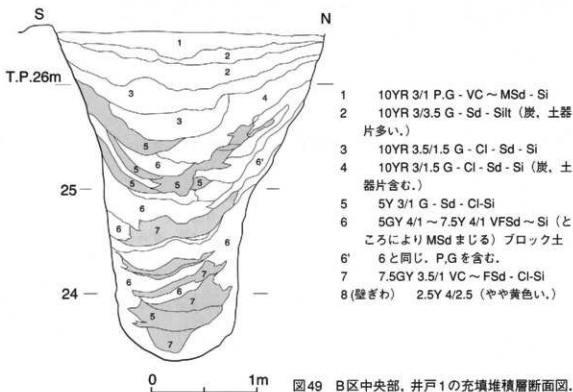


図49 B区中央部, 井戸1の充填堆積層断面図.

井戸1

本調査区中央部の井戸1の検出面での掘方は, ほぼ円形をなし, 直径は約2.5m. 深さは3.2mで, 上半の内径は漏斗状に狭まり, 下半では1.3~1.1mになる. 底面は椀状に窪む. 井戸側はなかった. 井戸内下半の堆積物は, 有機物に富む砂質泥層と側壁から崩落したブロック土層がそれぞれ数cm~10数cmの厚みで, ほぼ互層をなし, 下底から2/5の深さまでは, 明瞭な粘土の紫層が複数枚挟まれ, とくに浅深の跡もないことから, 素掘りの井戸で, 埋積されるがままに使用されていたか, 放棄後, 開口したまましばらく放置されていたと推測される. 上部の3/5は「地山」堆積物のブロック土とともに, 土器片, 炭片, 礫が多くまじり, 人為的に埋められている. 地下水面まで充填堆積物の上面が達したため, 放棄され塵芥とともに埋め戻されたようである. 井戸の底から約50cmの層準で, まじないに用いられたと考えられる土師器, 須恵器がまとまって出土した. 掘方の壁面ではこの層準より下位にクラストサボートの砂礫層がみとめられ, 湧水層であったと考えられる.

掘立柱建物跡

本地区のおもに中央部から南部にかけて多くのピットが検出された. これら8世紀後半から9世紀初頭のピット群の掘削・充填年代は, おもにその充填堆積物に含まれる遺物の相対年代によって推測され, それにもとづき遺物を含まないものでも, 1辺50cm以上, 1m前後までの隅丸方形や円形の掘方なすものや, ひとまとまりの建物跡あるいは櫛列をなすものは, ほぼ同時期の遺構とみなしている. 現地では, 柱の通りがほぼ直交座標軸にのる16棟を認定した. 柱穴の底には根石を残すものもあった. 個々のピットの検討は省略し, 復原された掘立柱建物跡を以下に列挙する. 柱間は平均値で10cm精度.

掘立柱建物跡1 不完全な復原, 片側棟行のみ, あるいは櫛列3間(ないし4間), 柱間2.1m.

掘立柱建物跡 2 2×3間, 柱間約1.5m.



図50 B区中央部～北部の古墳時代～奈良-平安時代の遺構検出状況。北東向きに撮影。



図51 B区中央～南部の奈良-平安時代～中世の遺構検出状況。東向きに撮影。

図52 B区南部の古墳時代～中世の遺構検出状況。南東方向に撮影。



図53 B区北部、掘立柱建物跡1(右側)と2(左側)。北向きに撮影。北端部に朝析流路跡への落込みが見える。

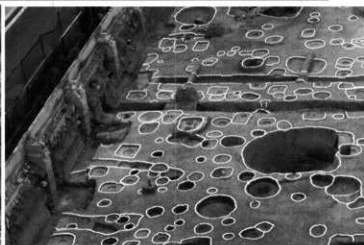


図54 B区中央部西寄り、奈良-平安時代の掘立柱建物跡3、4、5。北向きに撮影。右手の穴は井戸1。



図55 B区中央部東寄り、奈良-平安時代の掘立柱建物跡5、7、8。北東向きに撮影。右下の穴は井戸1。

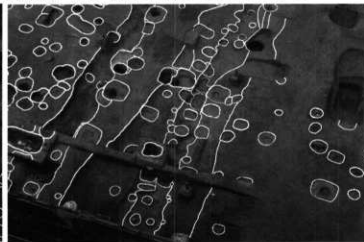


図56 B区中央部西寄り、奈良-平安時代の掘立柱建物跡9。北東向きに撮影。古墳時代の溝79～82を切っている。



図57 B区中央南寄り, 奈良-平安時代の掘立柱建物跡10, 11, 12. 東方向に撮影.

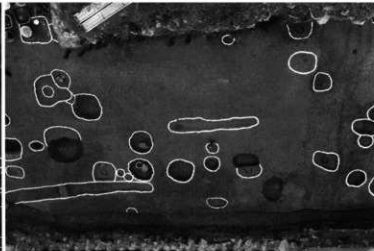


図58 B区南部北寄り, 奈良-平安時代掘立柱建物跡13. 東方向に撮影.

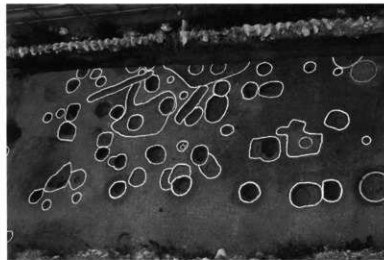


図59 B区南部, 奈良-平安時代の掘立柱建物跡14, 15, 16.

- 掘立柱建物跡3 一部柱穴不明, 2×3間, 柱間1.8m.
- 掘立柱建物跡4 一部柱穴不明, 2×3間, 柱間1.9m.
- 掘立柱建物跡5 一部柱穴不明, 2×3間, 柱間1.8m.
- 掘立柱建物跡6 一部柱穴不明, 2×3間, 柱間1.9m.
- 掘立柱建物跡7 一部柱穴不明, 2×3間, 柱間2.1m.
- 掘立柱建物跡8 2×3間, 柱間1.9m.
- 掘立柱建物跡9 2×2間, 総柱, 柱間2.0m.
- 掘立柱建物跡10 2×3間, 柱間1.9m.
- 掘立柱建物跡11 2×2間, 総柱, 柱間1.5m.
- 掘立柱建物跡12 2×2間, 総柱, 柱間1.8m.
- 掘立柱建物跡13 棟行片側のみ, おそらく2×3間, 柱間2.1m.
- 掘立柱建物跡14 一部柱穴不明, おそらく2×3間, 柱間2.1m.
- 掘立柱建物跡15 一部不明, おそらく2×3間, 柱間1.8m.
- 掘立柱建物跡16 一部不明, 2×2間ないし2×3間, 柱間1.8m.

掘立柱建物跡には2×3間のものと、2×2間の総柱のものがみとめられた。前者の棟行は南北方向である。後者は高床倉庫と思われる。計算上のばらつきを無視すれば、これらの建物の柱間は、5～8尺(30cm)単位の変異がみとめられる。これらの柱列の方位は直交座標軸に対して、4°以下で右ないし左回転している。

建物跡が重複して分布する場所がみられ、建て替えが少なくとも3回行われたと考えられるが、建物跡10と11が建物跡12に切られていること以外は、明確な切り



図60 a区奈良・平安時代面全景. 北から撮影.



図61 a区南半遺構完掘状況. 東から撮影.



図62 a区南半掘立柱建物207
検出状況. 南から撮影.

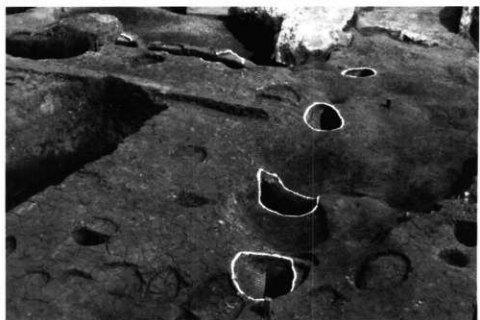


図63 a区南半掘立柱建物206
検出状況. 南から撮影.

図64 a区南半獨立柱建物平面図.

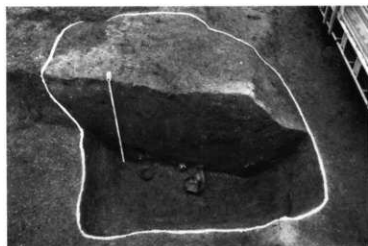
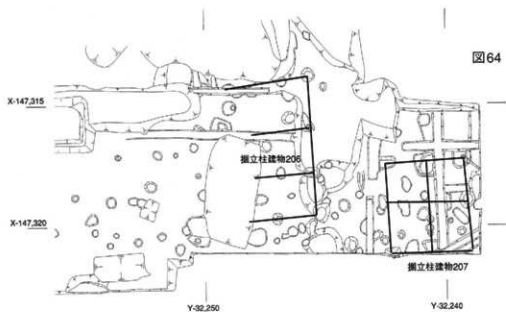


図65 a区井戸201立ち割り状況. 北から撮影.

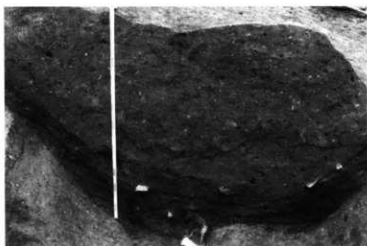


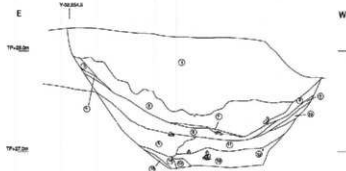
図66 a区井戸201北壁断面.



図68 a区井戸201完掘状況. 北から撮影.



図67 a区井戸201底部遺物出土状況. 東から撮影.



1. 10YR3/1黒褐色変砂 (10YR3/3暗褐色シルトブロック入る、カルシウム・鉄分入る)
2. 10YR3/1黒褐色シルト質粘土 (シルトブロック・スミ入る)
3. 10YR2/1黒褐色シルト質粘土 (腐泥)
4. 10YR2/2黒褐色シルト質粘土
5. 7.5Y2/1黒色シルト質粘土 (腐一色砂混、2.5Y5/2暗黄灰色シルト質粘土ブロック入る)
6. 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト (腐泥・変砂混)
7. 7.5Y1/7/1黒色スミ質粘土
8. 10YR3/1黒褐色シルト質粘土 (腐砂混)
9. 10YR2/2黒褐色粘質シルト (腐砂混)
10. 10YR2/1黒色変砂混粘土
11. 7.5YR2/1黒色粘質シルト
12. 10YR2/1黒色変砂混シルト質粘土 (土埴器混入る)
13. 10YR2/1黒色粘土 (腐泥入る)
14. 2.5Y3/2黒褐色粘質シルト (変砂混)
15. 5Y3/1オリブ黒色粘砂混粘土 (粘土ブロック入る)

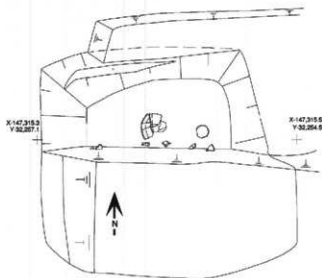


図69 a区井戸201の平面・断面図。

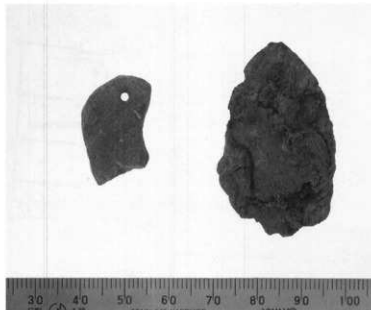
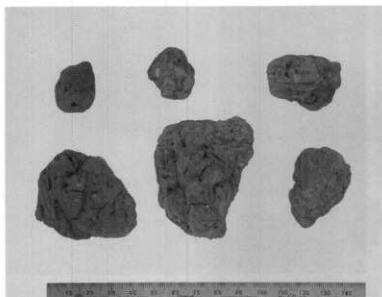


図70 a区井戸201出土遺物。滑石製勾玉・鉄鏃。



図71 a区井戸201出土遺物。土師器鉢・甕・皿。中央の甕の高さ13.9・口径16.2cm。



図72 a区井戸201出土遺物。土師器甕。高さ12.7・口径15.8cm。

図73 a区井戸201出土遺物。土壁。

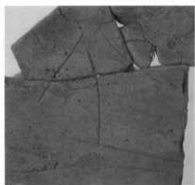


図75 線刻土器。「□」[全カ].

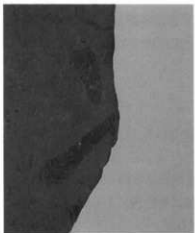


図76 墨書。「□」ニ水.

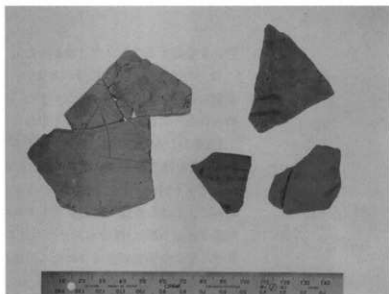


図74 a区井戸201出土遺物。土師器墨書土器片・線刻土器.



図77 墨書。「□」[一カ].



図78 墨書。「□」[ニカ].

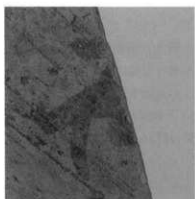


図80 墨書。「□」禾偏(図79左).



図81 墨書。「少□」[少カ](図79右).

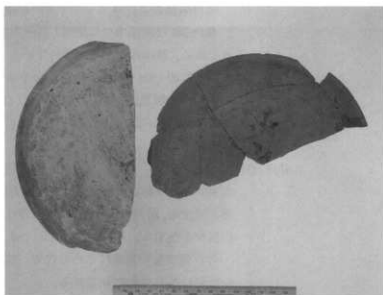


図79 井戸201出土土師器の底に書かれた墨書.

合いを確認することはできなかった。

以上の建物跡と同じ柱通の方位で、東西方向に並ぶピット列が、建物跡3～8の北側にいくつかみとめられた。また、建物跡3と6の間には、南北方向の列がみとめられた。これらは、欄列跡と思われる。

付図には現地で記録されたピットが表現されている。この中の怪しげなものを除外し、なお残る多くのピットを検討した結果、直交座標軸に対して20～25°右回転したピット列が、上述の建物跡の分布域に見いだされた。これらのピットは全般的にみて、上述した建物跡のピットより小さく、ほとんどのものは円形である。同方向を示すピット群はa区でもみとめられる。掘立柱建物跡と欄列跡と考えられるが、それぞれ完全な輪郭が復原されたものはない。先に述べた建物群が造成される以前の建物群と思われる。

a 区

南東「地山」直上部分で、建物跡が2棟検出された。

掘立柱建物跡 206

建物跡206はトレンチ南東端部で2間×2間分を検出した。東と南側がトレンチ外に広がるため本来の規模は不明である。軸はやや西にふるが座標にのる。柱間は1.8m、柱穴は一辺約0.7mの隅丸方形を呈する。

掘立柱建物跡 207

建物跡207は建物跡1の西隣で南北3間×東西2間を検出した。長軸はやや西にふるが座標にのる。柱間は1.8m、柱穴は一辺約0.7mの隅丸方形を呈する。出土遺物は少ない。

井戸 201

南西隅部および南部中央で井戸を検出した。

井戸201は南部中央に位置し、一辺2.5mの隅丸方形を呈する。井戸側はなく素掘りである。検出面が削平を受けていたため本来の規模は不明であるが、検出面からの深さは約1.4mを測る。堆積土層中には多くの遺物を含み、特に底部付近からはほぼ完形の土師器甕3個のほか、「少□(戸カ)」と書かれた1/2完形の土師器皿や判読不明な土師器の墨書土器破片等4点・砂岩製の砥石・滑石製勾玉・鉄鏃・モモ核などが出土した。

井戸 202

井戸202は南西端部に位置し、堀方の規模は南北約2.8m、東西約2.6mの不正円形を呈する。堀方のほぼ中央部分に約1.2m四方の方形プランを呈した横板組みの井戸側が存在する。

井戸側は横板組隅柱どめ形式で、四隅に最大幅約14cmを測る角柱が使用され、柱の間隔は芯芯で1.05mを計る。

また柱は4本とも芯持ち材を使用せず、柁目取りの一本を使用する。長さは先端が若干欠損しているが、残存長は3mを計る。(下部ホゾ部分含む)基部には直径7cmの円柱状のほぞを作り出す。

横板には長さ1.2mと1.6m・1.8mの3種類のものが使用される。幅は大小あるが、最大のものは60cmで、平均20cm、厚みは4cmを測る。各面13枚づつ良好な状態で遺存する。ほぼすべての横板の両端部分には、円形や長方形の刳抜を施したホゾ孔や、相欠き・鎌継などの仕口や継手の加工が施される。その加工はいずれも、井戸



図82 a区井戸202検出状況の遠景。南から撮影。

図83 a区井戸202検出状況の近景。南から撮影。

図84 A区井戸202平面・断面図。

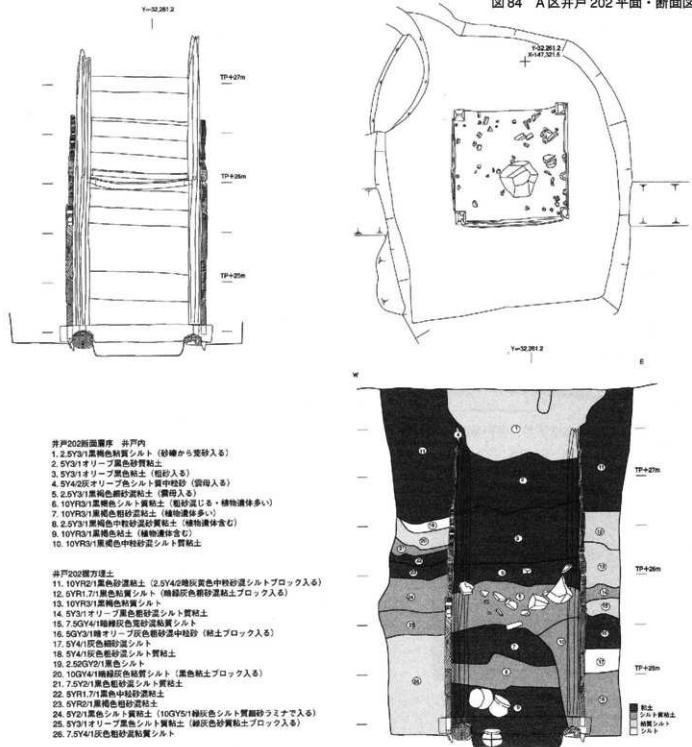




図85 a区井戸202上半半截状況。北から撮影。



図86 a区井戸202下半。南西から東面の横板を見る。



図87 a区井戸202下半。井戸側内堆積状況。南から撮影。



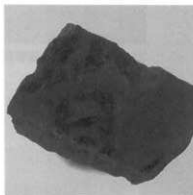
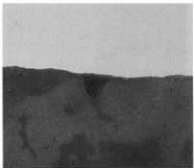
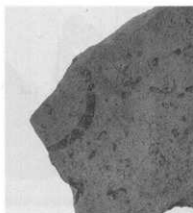
図88 a区井戸202南面下部基底部の構造。南から撮影。



図89 a区井戸202基底部根太検出状況。東から撮影。



図90 a区井戸202最下層出土。土師器甕を利用した釣瓶。出土直後の状態。



91	92	93
94	95	96
97		

- 図91 井戸202最下層出土墨書土器。
 図92 土師器底の墨書 [○カ]。
 図93 須恵器蓋の墨書 [○カ]。
 図94 土師器底の墨書 [○カ]。
 図95 土師器底の墨書 [○カ]。
 図96 土師器底の墨書 [□]。
 図97 土師器底の墨書 [□]。

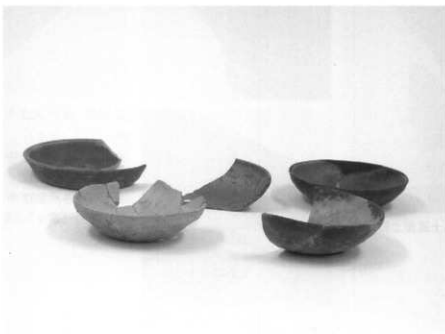


図98 井戸202最下層出土の墨書土器、土師器杯、椀。左手前の椀の口径14cm、器高4.1cm。

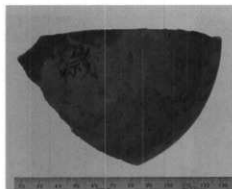


図99 井戸202最下層出土墨書土器「□」[歳カ].



図101 井戸202最下層出土墨書土器。「□」二水.

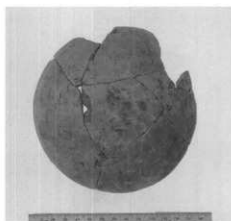


図103 井戸202最下層出土墨書土器「□」[小得カ].



図100 図99の墨書細部.



図102 図101の墨書細部.



図104 図103の墨書細部.

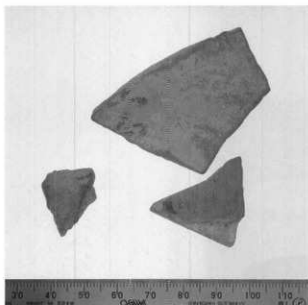


図105 井戸202中位出土墨書土器.

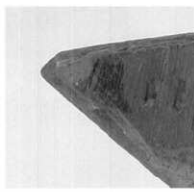
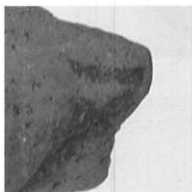


図106 井戸202中位出土墨書土器。「□」(左上).

図107 井戸202中位出土墨書土器。「□」(右上).



図108 井戸202中位出土墨書土器。「□」[富カ](左).



図109 井戸最下層出土土師器と黒色土器の椀。

図110 井戸最下層出土土師器甕。



側を構築する際に使用されていないことから、他の建造物からの転用材であることがわかる。

井戸202の構築方法

掘方完掘後、中央に水溜めを掘削し、その周りに基底部となる丸太を井桁に組む。このとき水溜の東側と西側に先に置きその上に南側と北側の丸太を置き相欠仕口で木組みする。丸太は動かぬよう西と東の丸太の外側に、2箇所づつ木製の楔で固定する。丸太の交点部分には予めほぞ穴が重なった2本を貫通するように穿たれる。交点の4ヶ所に釘取りの角柱をほぞで据え、柱を自立させる。柱には、下から1.6mの部分に棧が取りつく方形のほぞ穴が開けられ、4本の棧で柱の自立を補強する。

この井戸の横板は長いもので短いものを挟みながら積み上げる方法が取られる。

柱の外法に、まず南北面には120cmの短い横板を設置し、東西面には南北面の横板を挟むように160cmないしは180cmの長い横板を当てる。堀方断面の観察では、1～3枚ごとに堀方を埋め戻していった事がわかる。

第22次調査では、横板の積み上げと堀方の埋め戻し（いわゆる裏込め）を同時に行う方法で井戸が造られたことがわかった。

井戸202の出土遺物

細片で判読不明な墨書や「○」を書いたと思われる墨書土器のほか、井戸底部分から植物の蔓を編んで頸部から体部を包み、釣瓶として使用したと考えられる完形の土師器甕の他、完形の甕4点などの土器類（図110）・切断痕の残るシカ角（図115）・有頭棒（図111）・横櫛（図112）・「隆平永宝」（796年初鋳）1点（図113）が出土した。

今回は井戸の堆積土を可能な限り堆積土層ごとに水洗選別し、層中の微細遺物の検出に努めた。

方法は、層ごとに掘削した堆積土を、流水の中で3mm・2mm・1mmのフルイに通

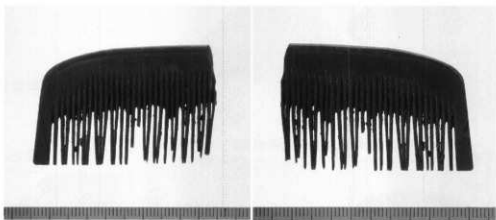
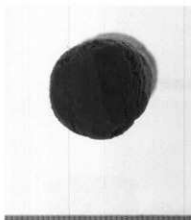


図112 井戸202最下層出土，横櫛。



図111 井戸202最下層出土，有頭棒，横からと上から。



図113 井戸202最下層出土，銅錢「隆平永寶」。



図114 井戸202出土，小動物の骨の一部（カエル・魚ほか）。



図115 井戸202出土切断痕跡の残るシカ角と穿孔のある獣骨。



図116 井戸202出土白玉。



図117 井戸202出土滑石製有孔円板、白玉、鉄釘。



図118 井戸202出土、モモ核と種子の一部。



図119 井戸202出土、モモ核。



図120 井戸202出土、割り込みのあるモモ核。



図121 井戸202井戸側基底部材。上面(右上)、側面(右下)、隅柱が取り付け軸穴と相欠仕口(左)。

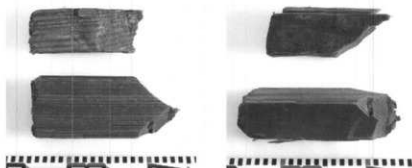


図122 基底部材を固定するくさび。



図123 井戸202、基底部材直上の横板(右)と加工痕跡(左)。



図124 井戸202扉転用の横板(左)と扉軸および周辺の加工痕(右)。

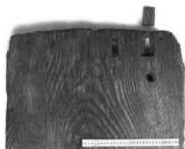


図125 井戸202下部の横板(左)と端部に残る加工痕跡(右)。

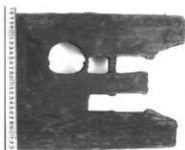


図126 井戸202の両端部に加工痕のある横板1(左)と加工痕の細部(右)。



図127 井戸202の両端部に加工痕のある横板2(右)と加工痕の細部(左)。



図128 井戸202の両端部に加工痕のある横板3(左)と加工痕の細部(下左・下右)。

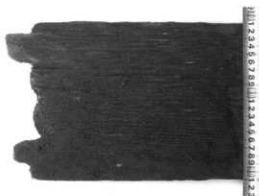




図129 井戸202の一方の端部に加工痕のある
横板1(左)と加工痕の細部(右)。



図130 井戸202の一方の端部に加工痕のある
横板2(左)と加工痕【相欠仕口】(右)。



図131 井戸202の一方の端部に加工痕のあ
る横板3(左)と加工痕の細部(右)。

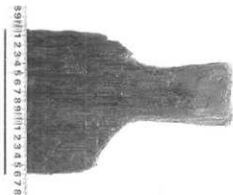


図132 井戸202の棧(左)と端部のほぞ(右)。





図133 井戸202隅柱。棧の取り付くほぞ穴のある面(上)とない面(下)。



図134 井戸202隅柱。棧の取り付くほぞ穴。



図135 井戸202隅柱仕口付近に残る加工痕跡。 図136 井戸202隅柱。最下部の仕口〔ほぞ〕。



図137 井戸202隅柱。仕口下端切断面。

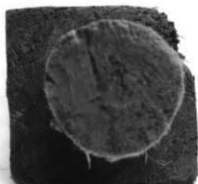


図138 井戸202隅柱。仕口ケズリ出し面の加工痕。

試料番号	長さ	幅	厚さ	朝込長さ	朝込幅
1	3.2	2.3	1.7	1.2	1.3
2	3.2	2.2	1.6		
3	2.9	2.2	1.7	1.3	1.1
4	3.3	2.2	1.5	0.9	1.1
5	2.7	2.2	1.7	1.2	0.9
6	3.1	2.1	1.5		
7	2.9	2.1	1.4		
8	2.9	2.3	1.6	1.1	1.1
9	2.9	2.1	1.5	1.1	1.1
10	3.1	2.2	1.5		
11	2.8	2.1	1.6	1.2	1.1
12	3.0	3.5	1.9	1.3	1.2
13	2.8	1.8	1.2		
14	2.8	2.0	1.6	1.2	1.1
15	3.0	2.5	1.6	1.1	1.1
16	2.8	2.3	1.7	1.0	1.0
17	2.6	1.9	1.7	1.1	1.1
18	3.2	2.5	1.5		
19	3.0	2.0	1.5		
20	3.3	2.5	1.7		
21	3.0	2.2	1.5		
22	2.6	1.9	1.3		
23	2.5	1.2	1.6		
24	3.0	2.2	1.2		
25	3.6	2.4	1.9		
26	3.0	2.1	1.5		
27	2.9	2.0	1.4		
28	2.4	2.0	2.0		
29	2.7	2.7	1.4	1.0	1.1
30	2.6	2.2	1.7		
31	2.7	1.9	1.4	1.0	1.1
32	2.5	2.5	1.6		
33	2.9	2.0	1.6		
34	2.8	2.2	1.8	1.3	1.3
35	3.1	2.2	1.4		
36	3.0	2.1	1.4	1.1	1.0
37	2.7	2.1	1.6	1.2	1.1
38	3.0	2.1	1.9		
39	2.3	1.7			
40	3.0	1.9	1.5	1.0	1.2
41	3.2	2.1	1.6	1.5	1.3
42	2.9	2.0	1.6	1.2	1.0
43	2.9	2.5	1.8	1.4	1.2
44	3.0	2.2	1.5		
45	3.1	2.0	1.4	1.2	0.8
46	2.8	2.1	1.5	1.1	1.2
47	2.9	2.1	1.5	1.0	1.1
48	2.3	1.9	1.5	1.2	1.2
49	2.5	1.8	1.5	1.0	1.0
50	3.1	2.1	1.5	1.2	1.2
51	3.2	2.3	1.5	1.3	1.1
52	2.4	2.0	1.8		
53	3.0	2.0	1.4	1.2	1.1
54	3.0	2.1	1.5	1.3	1.1
55	2.8	2.1	1.6	1.0	1.2
56	2.8	2.1	1.5	1.1	1.0
57	3.0	2.1	1.6	1.2	1.1
58	2.6	1.8	1.4	1.1	1.0
59	3.1	2.1	1.5	1.2	1.0
60	2.8	1.9	1.4	1.0	1.1

表1 井戸202出土モモ核計測表

c区

土壌201

南東隅部分の土壌201は南半部がトレンチの外に広がるため本来の規模は不明であるが、直径約2mの不正円形を呈する。上面が攪乱で削平されているが、深さは約1.1m。遺物が全く出土しないことから詳細な時期は不明であるが、掘り込み面や検出状況から奈良・平安時代に比定できる。また規模などから井戸の可能性も考えられる。

東半部のビット群

東半(段より上)で多数のビットを検出した。ビットの大半で柱当りの痕跡が認められ柱穴として機能したことがわかる。

ビットからは細片の遺物の出土がほとんどで、遺物による時期の検討はできない。しかしビットの規模に大小あり、その違いが時期差を反映するものと考えられる。

掘立柱建物跡201～205

掘立柱建物跡を5棟検出した。いずれも長軸はほぼ南北座標にのる。

掘立柱建物跡201は南部中央に位置し、東西1間×南北1間分を検出した。柱間は

した後、フルイに残った遺物を取り上げた。

井戸中位から下の堆積層中より滑石製の白玉が49個、同じく滑石製の有孔円盤1点、そのほか滑石の破片・鉄釘などが出土した(図116, 117)。主に古墳時代の遺物と考えられる滑石製の白玉や有孔円盤などの製品や破片などが、平安時代初頭と埋没年代が考えられるこの井戸から多数出土したことについてみると、次の2点が考えられる。1には井戸祭祀にさいして使用されたもの。2には井戸掘削時に前代の遺構ないしは包含層を掘削したため混入したものである。

1の祭祀に使用したと考えるならば、この時代まで白玉を祭祀に使用した明確な例としては沖ノ島の例の他あまり例を見ない。したがって、白玉を使用した祭祀の下限年代を引き下げる例となるだろう。しかし、白玉の出土を広い意味では、井戸内の一括資料としてとらえることは可能であるが、今回のように、一つの堆積層から一括して出土したのではなく、中位から下位にかけて出土する状況からは、埋納行為と認定するに十分な出土状況を呈しているとは言えない。

井戸周辺をみると、13次調査で古墳時代の包含層中より多くの白玉や破片を検出したことから、2で考えたように、井戸掘削時もしくは廃絶時に混入したものと考える事も可能である。ただ、堀方からほとんど白玉が出土していないことや13次調査で検出した井戸からは、滑石製品の出土の報告がないことなどから、2の状況をも手放しでは受け入れられない。この問題については、今すこし検討の余地がある。

その他、洗い出しでは多量の小動物(カエルやネズミ)や魚の骨(図114)・甲虫類の前胸や上翅、植物の葉・植物繊維で編んだ笊状の編み物断片・種子などととも、多数のモモ核(図118)が出土した。モモ核は総数67個(内2個が半分)出土したが、その中の40個には側縁部から中央部にかけてU字型に切り込みが認められる。切り込みはどれも仁を内包する部分に達する。

モモ核の大きさは、平均長さ2.88cm、幅2.13cm、厚さ1.58cmを呈する。切り込みの規模は平均で長さ1.12cm、幅1.09cmを測る。(表1)



図139 c区奈良・平安時代遺構面。西から撮影。



図140 c区奈良・平安時代遺構検出状況。東から撮影。

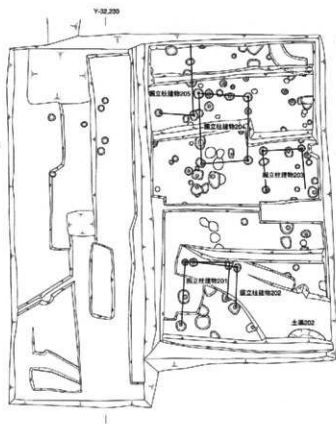


図141 c区遺構平面図。

図142 e区地層堆積状況。南東から撮影。



芯芯で東西2.1m、南北1.8mを測る。掘立柱建物跡202は建物跡201の東に少しずれた位置にあり、建物跡201と柱間もほぼ同規模であることから、立て替えと考えられる。しかし、建物跡201と202の前後関係は不明である。

掘立柱建物跡203は東端に位置し、東西1間×南北1間分を検出した。柱間は芯芯で東西2.1m、南北1.8mを測る。

掘立柱建物跡204は北部に位置する。東西2間×南北3間分を検出した。柱間は芯芯で1.2mを測る。他の建物跡に比べ最も柱間が短い。

掘立柱建物跡204は北端部に位置し、東西1間×南北1間分を検出した。柱間は芯芯で1.6mを測る。

e区

土壌、掘立柱建物跡23

土壌とピットを検出した。土壌は、北半分がトレンチ外に広がるため本来の規模は不明であるが、直径1mの不正円形を呈する。深さは0.3m。トレンチ北辺に2間分の列をなすピットが検出され、A東区北辺で検出されたピットと合わせて柱間が約2.1～2.2mの掘立柱建物跡23が復原された。中世遺構の可能性がある。

f区

ピット群

東側地山直上で多数のピットを検出した。ピットには直径0.2や直径0.3mの不整形円形を呈するものと直径約0.5mの不整形円形を呈するものがある。同一面での検出であるが、ピットの規模が時期差を示すと思われる。

中世以降の整地により、盛り土が行われていたことから、比較的下位の遺構の残りは良かったが、近代以降に受けた擾乱によって削平された部分も多く、建物跡の復原には至らなかった。

中世の遺構

中世の遺構は、ピットや近傍の包含層から出土した遺物の相対年代から、平安時代の末期から続く鎌倉時代(11世紀中頃～12世紀中頃)の遺構と室町時代末期から安土・桃山時代にかけて(16世紀まで)の遺構がみとめられた。これらの分布域は、調査地全体でみると西辺と南部に分布していた。ピット、土壌、土壌墓、掘立柱建物跡、溝などが検出された。鋤跡や耕作土層、耕作地の造成にともなって造られた段や石垣、その基部の溝、整地・盛土層などは、出土遺物から推測して、16世紀にはすでに形成されており、その造作は近世・近代の耕作地に引き継がれたと考えられる。

c区

石敷遺構

本調査区の開析流路に向かう緩斜面には、地表下約1mから下位の「地山」までに、厚さ約0.3mで遺物中世遺物包含層分布する。本層は塊状の砂質シルトからなり、耕作土層と考えられ、谷地形を埋積・平坦化するかたちで、開析流路側に厚く堆積していた。調査区北端部の「地山」上面で、斜面のコンター方向に幅約2.5mで分布する礫の集まりが検出された。礫には細粒の中礫からもっとも小型の巨礫まであり、拳大のものが卓越していた。亜角礫が多い。岩石種は上流側の山地斜面に産出する黒雲母花こう岩と角閃石はんれい岩であった。比較的大きな礫の分布するところ以外は、大小不揃いだが、礫1個分の厚みで拡がり、覆瓦構造などの流水による堆積構造はみとめられなかったため、人為的に造られた敷石施設の遺構と考えられる。しかし、



図143 f区古代遺構面，東から撮影。

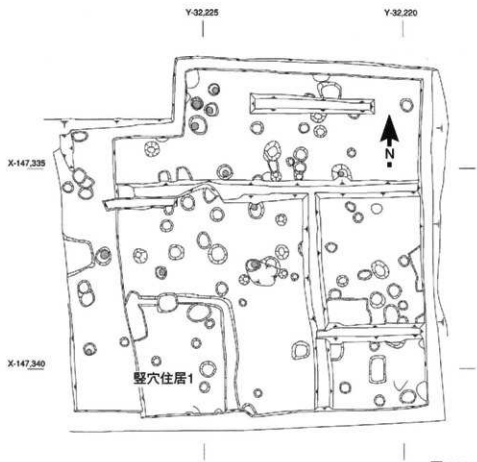


図144 f区古代遺構面平面図。

その目的・機能はまだ推定していない。この遺構を覆う堆積層からは瓦器碗の細片が出土した。

B区

本調査区のおもに西辺に分布する奈良-平安時代の遺物包含層の上面付近で、12世紀後半の遺物をともなう遺構が検出された。土塚墓1, 2, 獣骨ピット, 掘立柱建物が同時期の集落ともない, 他の溝はその前後に形成されたと考えられる。2基の土塚墓は, 屋敷地内に設けられたものと思われるが, 近傍で建物跡は検出されなかった。

土塚墓1

検出面での土塚の形状は, 南北83cm, 東西66cmの半隅丸方形で, 南半は隅がな

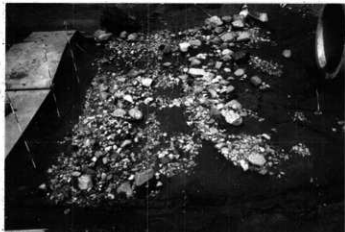


図145 C区北端、中世の石敷遺構。西向きに撮影。

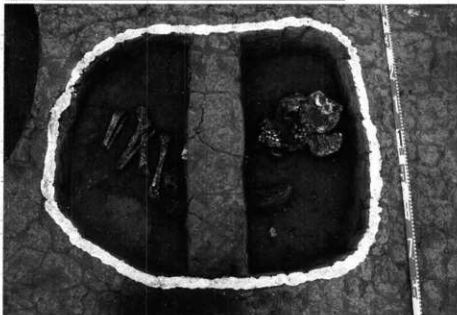


図146 B区中央部西寄り、平安時代末～鎌倉時代初頭の土墳墓1。横臥屈葬の幼児骨が検出された。頭位は北。スケールの塗り分け20cm。

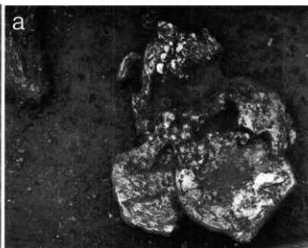


図147 土墳墓1の幼児骨、部分。a: 頭骨。南向きに撮影。b: 腰骨の一部と下肢骨。北向きに撮影。

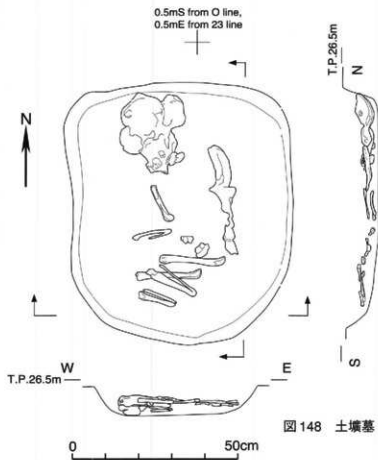


図148 土墳墓1の平面・断面図。



図149 B区中央部西寄り、
平安時代末～鎌倉時代初頭
の土壌墓2. 仰臥伸展葬の成
人男性骨が検出された。頭
位は北。スケールの塗り分
け20cm. 中央の皿の東側に
小刀が見える。

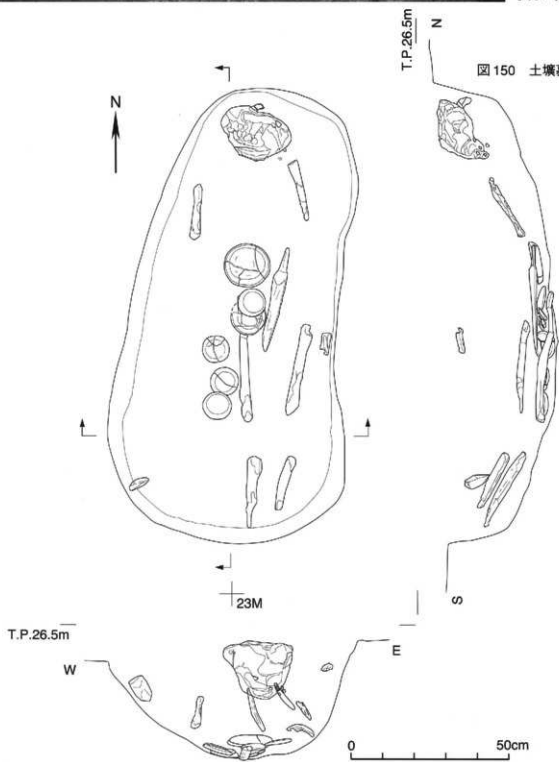


図150 土壌墓2の平面・断面図。

く丸い。深さは最深部で10cm。礫まじり砂質シルトのブロック土で充填されていた。

土壌の底面から数cmの高さで、ほぼ水平に人骨が埋没していた。北辺の西寄りに、平たく押し潰れた、下顎骨をともなう頭骨、中央部東寄りに脊柱、西寄りに上腕骨と尺骨、橈骨(各1点)、南寄りに腰骨の一部と思われる破片2点、土壌の南部には、左右の下肢骨(大腿骨、腓骨、頭骨各2点)がみつめられた。これらの配置から、下肢を折り曲げ、腕をかかえ込んで、やや俯き、西向きに横臥した姿勢が復原される。土壌空隙での埋葬後の移動はなかったようにみえる。骨の大きさ、下顎の乳歯などから、6〜7才の小児骨と判断された。副葬品はなかった。

土壌墓2

土壌の形状は、南北145cm、北半部の幅約60cm、南半部の最大幅76cmの長楕円に近い隅丸方形。検出面からの最大深部は土壌中央部で、35cm。縦断面では深さ20cmまでの側壁は急傾斜をなし、それ以深では緩やかに皿状に窪む。横断面は浅いU字形をなす。わずかに礫のまじる砂質シルトのブロック土で充填されていた。

人骨は土壌縦断面形に沿って、底から数から10数cm浮き上がった状態で埋没していた。北端から、頭骨、左右の上腕骨、左右の大腿骨、左右の頸骨がみつめられた。頭骨は北端部の土壌側壁を枕にし、検出面付近での後世の顛圧によって頭頂部は平坦に押し潰されていた。腰骨は土壌中央の最深部に位置したと考えられ、埋没後、縦方向の傾斜に沿って、人骨がわずかに下方に移動したように見える。遺体の身長は土壌の長軸よりも少し長く、上体をやや前屈し、下肢は少し曲げた仰臥姿勢で埋葬されたと考えられる。成人男性の人骨である。副葬品は土師器の皿と、長さ32.8cmの小刀であった。皿は右大腿骨の上に乗っており、副葬品は遺体の直上ないしは上方に置かれたと考えられる。木棺の痕跡は認められなかった。

なお、土師器皿の相対年代を土壌1にも適用した。

獣骨ピット

柱穴である。検出面では、南北55cm、東西50cmの不整形で、やや南寄りに直径約15cmの柱根の痕跡がみつめられた。深さ17cm。掘方の充填堆積物中の、下底より5cmの高さでほぼ水平にウマの下顎骨の片側が埋まっていた。これは意図的に埋められたと思われる。

溝41、40、39、32

B区中央部から北部にかけて、調査区を東西に並行して横切る(あるいはそのように復原できる溝が数条検出された。北端部の開析谷の南縁辺の溝40は幅40〜50cm、深さ15〜20cm。この溝に切られた溝41は、開析谷の縁辺に沿って北に湾曲している。深さ、幅は溝40とほぼ同じ。

中央部北寄りの土壌1を切る溝39は、幅約25cm、深さ4〜12cm。この南側の溝32は、幅30〜65cm、深さ18〜60cm、断面形は逆台形。検出状態では、西に向かって深さ、幅を増すので、緩斜面に掘られたと考えられる。東寄りの地点で、南北方向のより細い溝が合流していた。また、不明瞭だがA西地区にもこの延長がみつめられた。図示していないが、この溝の南側にも、数mの間隔を置いて2、3条の溝が検出された。これらは、先に述べた土壌墓、次に述べる建物跡から知られる集落の廃絶直後に形成された耕作地にとまなうものと考えられる。

掘立柱建物跡17、18

B区の南部では、「地山」の上面は南向きの緩やかな斜面をなし、その上に11世紀中頃から鎌倉時代の遺物包含層が分布していた。その下面付近から掘り込まれたよ

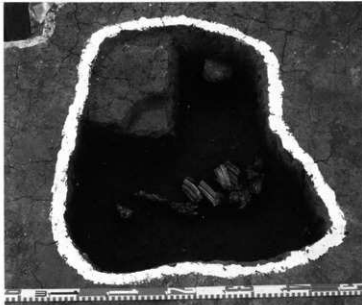


図151 B区中央部西寄り、平安時代末～鎌倉時代初頭の獣骨ビット、西向きに撮影。スケールの塗り分け20cm。南西隅に充填堆積物と柱根の痕跡の一部を残す。

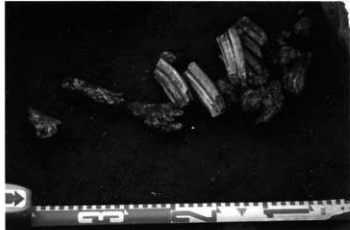


図152 獣骨ビット内のウマの下顎骨片側。スケールの文字の高さ5cm。西向きに撮影。

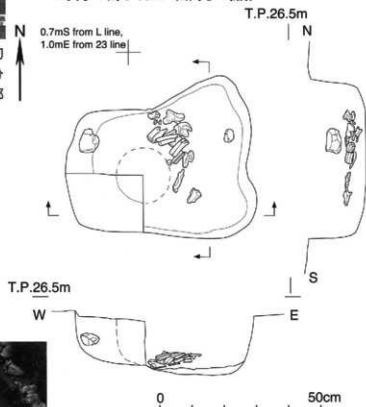


図153 獣骨ビットの平面・断面図。ビット中央の円は柱の痕跡。



図154 B区南部、平安時代末～鎌倉時代初頭の掘立柱建物跡17。トレンチの幅約7.5m。

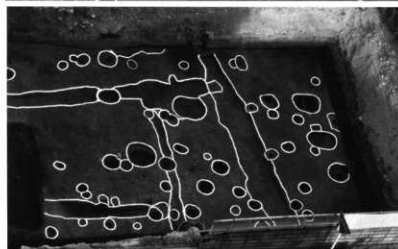


図155 B区南端部、平安時代末～鎌倉時代初頭の掘立柱建物跡18。溝1, 5, 69。東向きに撮影。トレンチの幅約7.5m。

うに見えるピット群が検出され、2棟の掘立柱建物跡が認識された。建物跡17は不完全な復原で、2×2間あるいは棟行が東西の2×3間で、柱間は1.8m。柱の通りは直交座標軸に対して約10°左回転。建物18は東西の棟行で2×3間。柱間は1.8m。3°左回転。これらの建物跡の近傍では、相前後して同時期に形成されたと考えられるピット列が2、3みとめられた。

溝1, 2, 5, 69

上述した掘立柱建物跡18、ピット群に切られて、幅50～100cm、深さ20～60cmの溝が検出された。排水とともに、歴敷地ないしは耕作地を区画していたと思われる。溝32、39との並行関係は確かめられないが、出土遺物から12世紀代の遺構と判断された。

A南区, A西区

A南区の西部とA西区の南部では、数個の奈良-平安時代のものと思われるピット以外に、黒色土器、瓦器、土師器、須恵器など中世の遺物片を含むか、それと類似した充填堆積物をともなう遺構が分布した。出土遺物の年代は、11世紀頃から16世紀まであり、個別のピットの年代決定や掘立柱建物跡の認定はほとんどできなかった。このなかで、A南区西部の2つの遺構が識別された。

井戸4

円形の土壌にも見える。検出面での掘方は、直径90cm。約60cm以深では、直径50cmの円筒形の掘方をとりあえず掘削したが、底は認識されなかった。この部分は、「地山」層に酷似する砂礫まじりシルト質粘土で充填されており、遺物は含まれず、深さ60cmまでの充填堆積物に切られていた。井戸としても、浅かった可能性がある。深さ60cmまでの堆積物は、砂まじり粘土質シルトに、土器片、焼土片、礫、灰、炭片、「地山」のブロック土などを含んだもので、下半では、焼土片と泥が葉理がみとめられた。11世紀中頃の黒色土器、瓦器碗、土師器皿が採集された。

掘立柱建物跡19

東西方向の棟行で、2×3間、柱間は2.1m。柱列はほぼ直交座標軸にのる。柱穴から室町時代後半(16世紀代)の土器片がわずかに出土した。調査地内のほとんどの領域では、同時期の遺物を含む堆積層は、耕作土層として分布しており、この建物は孤立していたか、集落の縁辺にあったと考えられる。

A東区

土器溜まり

12世紀中頃の土師器、瓦器、須恵器の破片を多産する土器溜まりが、本地区南西部、A西区との境にかけての斜面に分布していた。この場所のマトリクスは、耕作地の造成に際して、遺物が示す相対年代より新しい時期に再堆積した盛土と考えられる。f区の土器集積と同じ堆積層と同時期である。また、次に述べる土壌群の形成の前後関係あるいは同時性も、さらに詳細な資料の検討を要するが、集落領域が耕作地に改変された際に形成された遺構と考えられる。

土器および(あるいは)礫の集積土壌群

A東区南東部に分布する一群の土壌とc、f区に挟まれた部分の土壌177には、覆土とともにひとまとまりの土器あるいは礫が埋まっていた。礫を含む土壌は273、311、313、309、324で、土器を含む土壌314、331、292、両者が混在する土壌は279であった。土器、礫のいずれもが土壌の縁辺から一方に押されて落ち込んだか、縁



図156 A南区西部からA西区南端部の中世～近世(一部、奈良-平安時代を含む)遺構検出状況。南向きに撮影。左寄りに井戸4、掘立柱建物跡19が見える。

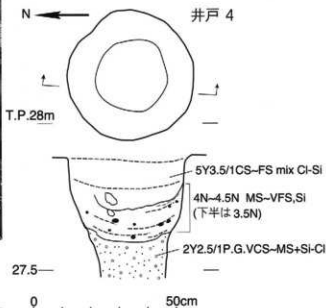


図157 A南区西部、井戸4の平面・断面図。



図158 A東区南西部の土器溜まり。平安末～近世の遺物を含む。南西方向に撮影。右上の石列は近世の石垣跡。



図159 A東区中央～北部、中世～近世の遺構検出状況。一部、奈良-平安時代、古墳時代の遺構を含む。南向きに撮影。



図160 A東区南部、中世～近世(一部、古墳時代)のピット群。礫あるいは(および)土器の集積土壌を含む。東向きに撮影。



図161 A東区南東部、平安時代末～鎌倉時代初頭の土器集積土壌292。南向きに撮影。

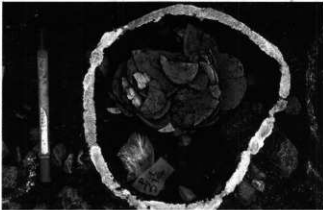


図162 土器集積土壌314。南西向きに撮影。

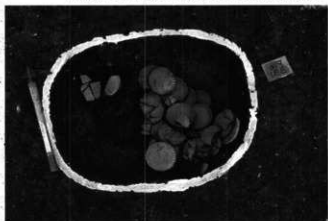


図163 土器集積土壌331。東向きに撮影。

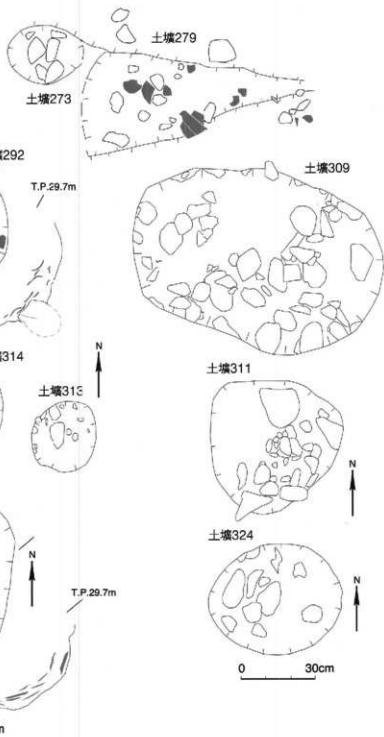


図164 A東区南東部、平安時代末～鎌倉時代初頭の礫あるいは(および)土器の集積二溝実測図。トーンは土器片。礫は輪郭のみです。

辺付近に積まれていたものが押し倒されて散乱したような散布状態であった。各土壌の大きさと遺物の特徴、散布方向を以下に示す。土器はいずれも12世紀中頃から後半にかけての遺物であった。

土壌273 33×24cm, d(深さ)=8cm, 中礫数個, 中央に偏在し, 東ないし西方向。

土壌311 55×55cm, d=13cm, 細粒の中礫～細粒の大礫20数個, 土壌内東側に偏在し, 東から西に散布。

土壌313 28×29cm, d=10cm, 細粒の中礫約10個と極粗粒, 粗粒の中礫, 土壌内北西方向に偏在し, 南東方向に散布。

土壌309 110×70cm, d=16cm, 中粒～極粗粒の中礫約30個と中粒以下の中礫約10個, おもに南東側に偏在し, 北西方向に散布。

土壌324 54×46cm, d=10cm, 中粒～極粗粒の中礫11個, 西側に偏在し, 東方向に散布。

土壌314 49×43cm, d=14cm, 土師器皿10数個体分, 南半に偏在し, 南南西にわずかに移動。

土壌331 65×50cm, d=12cm, 土師器皿約30個体分, 南側偏在し, 北北東方向に散布。

土壌292 45×48cm, d=16cm, ほとんどが土師器皿約20個体分破片, 南西～中央部に偏在し, 北東側に散布。

土壌279 94×45cm, d=6cm, 浅い皿状のへこみで, 輪郭は不明瞭, 中礫10数個と土師器瓦器椀, 土師器羽釜の破片など。

散布方向には特別なパターンはないが, 礫と土器が弁別され, 人手によって動かされたこと, 土壌群の形成にはあまり時間間隙がない印象があることに注意したい。次に述べる土壌302はこの土壌群と同時期と思われる。土壌177は記録がないが, 同時期の土師皿がまとまって検出され, 上述の遺構と同種の土壌と思われる。

d区

土壌202

南西でビット・土壌202(図167)を検出した。直径約0.4m～0.2mの不正円形を呈するビットは, 数個検出されたが, 検出範囲が狭く建物跡は復元できなかった。

土壌202は, 西半分がトレンチ西方へ広がるため, 全形は不明だが, 南北1.1m東西1.3mの隅丸方形を呈する。深さは約1m。遺物は土師器・瓦器の細片のほか, 下層から人頭犬(0.4m～0.5m)の花こう岩礫が多量に出土し, 礫の一部には火変を受けたものもあった。これらは人為的に投棄されたものと考えられる。

a区

ビット群

南部で, 多くのビットを検出した。規模は直径0.3m前後。少量であるが出土した遺物から鎌倉時代の遺構と考えられるが, 建物跡は復元できなかった。

b区

南西部で土壌を, 西半部で南北方向の鋤跡を検出した。

c区

溝

西北西・東南東方向の溝を検出した。幅0.3m, 長さ2.5m以上, 深さは0.1mを呈する。

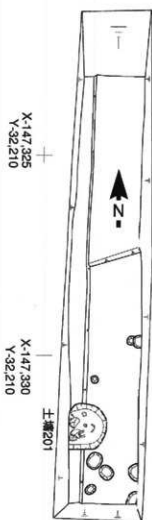


図165 d区中世遺構平面図.

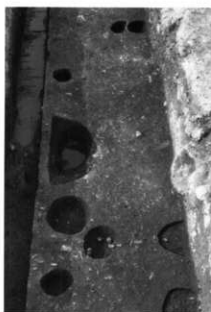


図166 d区中世遺構検出状況. 南から撮影.



図167 d区で検出した土壙201.



図168 e区中世遺構全景. 東から撮影.



図169 f区西半水路1検出状況. 南から撮影.



図170 f区東中央土器集積検出状況. 西から撮影.

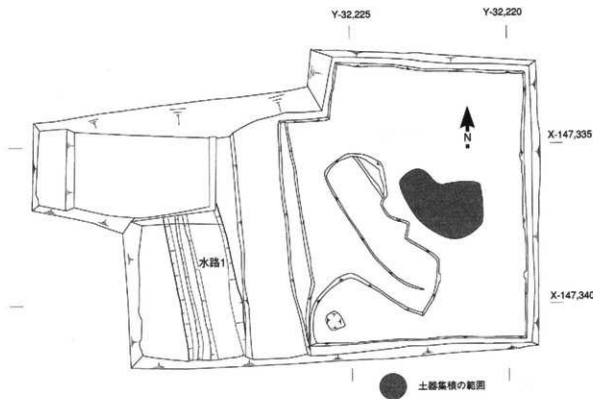


図171 f区中世遺構平面図。

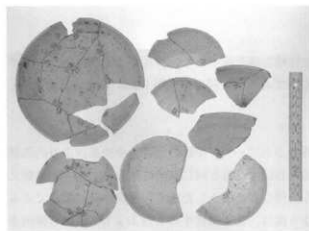


図172 f区中世土器の集積から出土した土師器皿。

f区

溝

西半部には、幅2m、深さ0.85mの溝が、南北方向にのびていた。西岸部分は、途中大走りの段を設けた二段掘りである。この溝は、北方に位置するc区およびe区でも、攪乱により底部のみ検出されたが、その延長が確認され、全長は45mを越える。

堆積土層中に水面下の堆積作用を示す粘土～粘質シルトのラミナが認められた。出土遺物は、細片だが瓦器・土師器など中世の遺物が出土した。

遺物の集積、包含層

トレンチ中央東寄りの部分では、遺物が多量に集積する部分が認められた。古墳時代の遺物や骨(人骨か獣骨かは不明)とともに、多くの土師器皿が出土した。遺物が集積する部分は、平面的な遺物の広がりは認められるが、掘り込まれた遺構は認められなかった。

このトレンチの東部に広がる包含層は、出土遺物に時期差が認められることや、堆積層中にブロック土や炭などが多量に混じることから、南落ちの斜面を耕作地として整地した際の盛土層と考えられる。整地の時期は、本層付近の遺物遺物の相対

年代から14世紀以降と考えられる。

近世以後の遺構

近代の工場建設に伴う基礎工事と施設の埋設によって、広範囲に攪乱されていたが、第13次調査区のA西・東区境界とA南・東境界に南北にのびる、中世後半以来の耕作地の段が後世まで存続し、近世に造られた石垣や暗渠など耕作地の施設がみとめられた。また、掘立柱建物の一部も検出された。

A西・東区境界

石組暗渠排水路

本調査区境界では、耕作地の段の基部に沿って南北に造られた石組暗渠排水路が延長約22m検出された。幅0.8～1m、検出面での深さ約0.6～0.7mの逆台形断面をもつ溝を掘り、内壁に中程までの高さをもつ扁平な巨礫を内面をそろえて立て並べ、幅約25cmの水路を作ったのち、この上面を巨礫で覆い、さらにこれらと掘方との間を中礫で平坦に充填し、砂礫質泥のブロック土で閉塞したものである。この上位には耕作地東辺に掘られた溝がみとめられた。暗渠水路底には、ほとんど傾斜はなかった。なお、このような排水暗渠の終端の一施設である、くり貫きの導水管と石組の貯水地がD区古墳時代竪穴住居跡と重複して検出された。

a区

掘立柱建物

南東端部で2間×2間分の掘立柱建物跡を検出した。攪乱による削平とトレンチ東方へ広がるため全体の規模は不明である。柱間は、東西1.2m、南北およそ1.6m。

b区

石列、石垣

東半部は、焼鈍の炉によって攪乱されていた。炉跡の西側、中央部西よりの北側で石垣に伴う石列を検出した。基底石は、石垣と同じ方向に掘られた溝の中に据えられていた。裏込めの堆積土から染付などが出土したので、近世以降の築造であることがわかる。この石垣をとともう溝は、北に隣接するA区およびa区でも検出された。

c区

石垣

中央西寄りでも南北方向の石垣が検出された。この石垣は、隣接するA東・西区の境界、f区および北側のe区でもこの延長が検出され、全長は50mを越える。

後世の攪乱によって、石材のほとんどが失われていたが、基底部の1石ないしは2石が残存していた。b区の石垣同様、基底石の下部には石垣列と同方向の溝が検出された。裏込め土には瓦器や土師器などとともに、陶磁器などの近世以降の遺物が含まれていた。

参考文献

- 宇野隆夫(1982)「井戸考」、『史林』、第65巻第5号、史学研究会、1-39。
古代の土器研究会編(1992)「都城の土器集成」、『古代の土器1』、古代の土器研究会、
古代の土器研究会編(1993)「都城の土器集成II」、『古代の土器2』、古代の土器研究会、



図173 A南-西区境界を南北にのびる近世～近代の石組暗渠。南南東向きに撮影。画面の暗渠の長さ約20m。

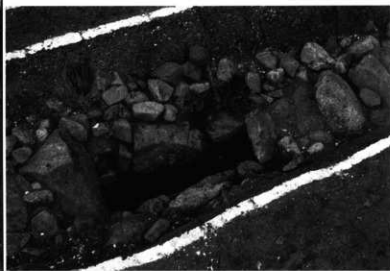


図174 石組暗渠上部の石材を一部除去し、水路を露出させたところ。東南東向きに撮影。掘方の幅約95cm。



図175 a区南東端部で検出した近世の掘立柱建物。東から撮影。



図176 b区西半で検出した近世以降の掘立柱建物。南から撮影。

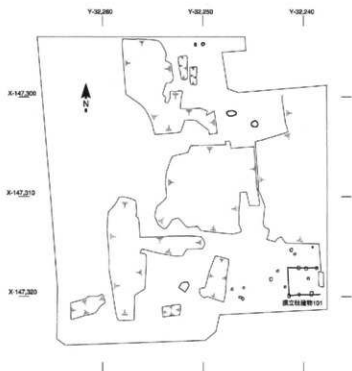


図177 a区近世以降平面図。

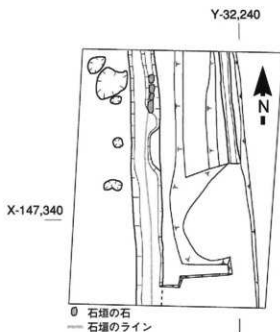


図178 b区近世以降の遺構平面図。

- 井上和人(2000)「平城宮造営尺長について」、『奈良国立文化財研究所年報 2000-III』。奈良国立文化財研究所, pp.47.
- 竹中大工道具館編(1989)『竹中大工道具館 展示解説』竹中大工道具館, pp.50-51.
- 日本甲虫学会編(1972)『原色日本甲虫図鑑(上)甲虫編』保育社, pp.3-9.
- 奈良国立文化財研究所(1993)『木器集成図録 近畿原始編』奈良国立文化財研究所史料第36冊, 奈良国立文化財研究所.
- 福永信雄・津田美智子(1999)「鬼塚遺跡第13次発掘調査報告(遺物編)」、『鬼塚遺跡第13次(遺物編)15次発掘調査報告書』, 財団法人東大阪市文化財協会, pp.1-116.

報告書抄録

おにづかいせきだいじほくごうへん) 22じほくつちようきほうこくじょ

書名 鬼塚遺跡第13次(遺構編)・22次発掘調査報告書
副書名
編著者名 松田順一郎, 池崎智詞
編集機関 財団法人 東大阪市文化財協会 発行機関 財団法人 東大阪市文化財協会
発行年月日 2002.12.31 作成法人ID 42710
郵便番号 577-0843 電話番号 06-6736-0346
住所 東大阪市荒川3-28-21
おにづかいせき
遺跡名 鬼塚遺跡
市町村コード 27227 遺跡番号 39

13次調査 (担当: 松田順一郎)

ひがしおおさかしなんせうりょう

遺跡所在地 東大阪市南荘町1032-1 他
調査期間 1990年7月26日～1991年10月21日
調査面積 5651m²
調査原因 共同住宅建設

22次調査 (担当: 池崎智詞)

ひがしおおさかしなんせうりょう

遺跡所在地 東大阪市南荘町132-10, 14, 15, 143-1
調査期間 1999年5月25日～1999年11月10日
調査面積 1115m²
調査原因 老人施設建設

北緯 34° 38' 40" 東経 135° 40' 29" JGD2000

種別 集落跡, 耕作地跡

主な時代 古墳時代中期後半～後期, 奈良時代末～平安時代初頭, 平安時代末～鎌倉時代, 室町時代後半, 近世～近代.

遺跡概要 遺物: 須恵器, 土師器, とりべ, 滑石製玉類, 黒色土器, 瓦器, 銭貨, 線刻土器, 土器釣瓶など. 遺構: 古墳時代前期前半以前の開析流路跡. 古墳時代の堅穴住居跡, 溝ピット, 奈良-平安時代の掘立柱建物跡, 井戸, 土壇など, 平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物跡, 土壇簿, 井戸, 土器溜まり, 土壇群など. 室町時代後半の掘立柱建物跡, 室町時代以後の耕作地跡.

特記事項 なし.

鬼塚遺跡第13次(遺構編)・22次発掘調査報告書

2002年9月30日

発行 財団法人東大阪市文化財協会

〒577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21

電話 06-6736-0346

印刷 株式会社 ミラテック

〒534-0025 大阪市都島区片町2-9-9

紙質 表紙 マーメイド(ベイジュ)210kg 本文 ニューエイジ57.5kg

鬼塚遺跡第13次・第22次発掘調査遺構平面図

